

小中高校の 学習指導に関する調査2023 ダイジェスト版

2023年度となり、GIGAスクール構想は3年目を迎えました。また、新しい学習指導要領は、2020年度より小学校で全面実施され、その後、中学校や高校でも、順次実施されています。

このような環境変化のなかで、ベネッセ教育総合研究所では、教員の指導の実態や意識を把握することを目的に、全国の公立の小学校・中学校には2020年から、全国の国公立の高等学校には2021年から、教員を対象にした調査を毎年実施してきました。その主な結果をご紹介します。

お茶の水女子大学名誉教授 青山学院大学客員教授

耳塚 寛明

この調査は、ベネッセ教育総合研究所が1997年から実施してきた「学習指導基本調査」を引き継ぎ、2020年以降、小中高校における「学習指導に関する調査」として再出発させたものである。

2020年の再出発以降、2023年までにすでに4年を数える。この間、問題関心は進化を経験した。2020年調査は、コロナ禍における学習指導に焦点を合わせ、休校期間にながかったのか、とくに家庭の経済的・文化的環境の凸凹をならす平等化装置としての学校の役割に生じた変化を浮かび上がらせようと試みた。

2021年調査と2022年調査は、①新学習指導要領の実施直前ないし直後の学習指導の状況を明らかにし、また②GIGAスクール構想1、2年目のICT機器の活用など、学校教育のデジタル化の進展に焦点づけた。その後、この二つの主眼のいずれについても、探究的な学びの機会の広がりや、ICT機器の整備や活用頻度など、いわば「量」が問われるステージから、学びと活用の質が問われるステージへと変化を経験しつつある。

そのような変化を踏まえて、2023年調査では、学習指導の質的側面を観察することに重点を置き、学習指導の質を支える諸条件を明らかにすることを試みている。そこでは、いかなる学習指導が、児童・生徒の資質・能力にどんな変化を及ぼすのかが問われることになる。今回の調査であらたに設定した分析視点の一つである。

この調査ではやや長期的な展望をもって、いま進みつつある紙と鉛筆の学びからデジタル化への変化を、単に道具の変化ではなく、学びと教育の様式を変えていく可能性があるものと捉えておきたい。いま進みつつある学習指導の変化が、10年後にどんな学びの様式へと結実するのか、期待をもって見守りたい。

目次

調査によせて・結果ハイライト	p.2-3
調査概要・基本属性	p.4-5
Part 1 GIGAスクール構想のもとでのICTの整備・活用	p.6-16
ーICT機器などの整備状況、活用実態、活用の効果と影響	
Part 2 新学習指導要領のもとでの学習指導	p.17-27
ー授業内容、授業方法、高校の探究活動、外国語の指導、学習評価	
Part 3 児童・生徒の資質・能力の育成と教員の指導観・学校環境	p.28-35
ー児童・生徒の様子、教員の指導観、資質・能力の育成、組織、仕事について	

Part 1 GIGAスクール構想（2021年度～）のもとでのICTの整備・活用

- 2021年からの2年間で、1人1台端末の整備が進んだ
 - 2023年度までに端末の導入が完了した小・中学校はほぼ100%、高校は85%（p.6）
- 授業におけるICT機器の活用頻度も大幅に高まり、教員も児童・生徒も、授業のさまざまな場面でICT機器を活用している
 - 半分以上の授業でICT機器を活用する教員は、小学校高学年で89%（p.10）
 - 半分以上の授業でICT機器を活用している児童は、小学校高学年で74%（p.11）
 - 協働的な学習とともに、個別の学習への活用も増加（p.12-13）
- しかし、端末の利用環境の充実度は十分に高まっておらず、それによる活用頻度の差が生じている
 - 利用環境の充実度は、ここ1年間では微増にとどまる（p.8-9）
 - 端末の利用環境のうち、「ICTの活用を推進する計画の立案」「教員間の活用ノウハウの共有」などが充実しているほど、教員や児童・生徒のICT機器の活用頻度は高い（p.10-11）
- 1人1台端末を活用した学習にはさまざまな効果実感がある一方で、懸念もみられる
 - 意見の表現のしやすさや協働的な学びへの効果実感が高まっている（p.14）
 - 「学力差が大きくなる」ことへの懸念は減少、「深く考えて問題を解くことが減る」は5割強（p.15）

Part 2 新学習指導要領（2020年度～）のもとでの学習指導

- 授業内容として、「明らかな解決法が存在しない課題に取り組む」「批判的に考える必要がある課題に取り組む」授業を行っている教員は半数に満たない
 - 小学校高学年の比率がもっとも高く、それぞれ48%、37%（p.17）
- 小・中・高校で、対話的・活動的な授業の比率が高まっている
 - 小・中学校は、ここ3年間で、対話的・活動的な授業が増加（p.18-19）
 - 高校でも対話的・活動的な授業が増加傾向（p.19）
 - 高校の探究活動では、学校外の場やリソースを活用する活動が増加（p.21）
- 授業で、児童・生徒が、学習内容や学習方法（学び方）を選ぶ場面が設けられている
 - 児童・生徒が「内容を自分で選んで学習する」は、小学校高学年で69%（p.17）
 - 児童・生徒が「方法を自分で選んで学習する」は、小学校高学年で60%（p.18）
- 多様な学習評価が行われ始めている
 - 小学校外国語の評価の材料として「パフォーマンステスト」が継続して増加（p.24）
 - ここ2年間で、学習履歴の活用が増加（p.26）
 - 高校では、中間・期末テストの回数が減少傾向、単元テストの回数が増加傾向（p.27）

Part 3 児童・生徒の資質・能力の育成と教員の指導観・学校環境

- 児童・生徒間の学力差を感じている教員は多い
 - 「児童・生徒間の学力差が大きい」と感じている教員は9割超（p.28）
- 個別最適な学び（指導の個別化、学習の個性化）を重視する意識がみられる
 - 不得意な教科や領域の学力よりも、得意を伸ばす指導を重視する教員が増加（p.29）
 - 授業の学習方法を「子どもが決めるのが望ましい」は小学校で6割弱（p.29）
 - 授業で「個々の子どもが異なる方法で学習を進めるのが望ましい」は小・中・高校で6～8割台（p.29）
- 教員は、児童・生徒のさまざまな資質・能力を高めようとしており、高まっていることを実感している。しかし、優先順位や高まっている実感の低い資質・能力もみられる
 - 「基礎的・基本的な知識・技能」を高めようとしている教員は9割弱、「批判的に考える力」「ふりかえる力」は2～3割（p.30）
 - 高まっていると思う資質・能力は「基礎的・基本的な知識・技能」「人と協力しながら、ものごとを進める力」「自ら意欲的に取り組む姿勢」（p.31）
- 組織において、同僚との良好な関係性や職務の自律性を感じている教員は多い。しかし、多忙な業務状況は続いており、それが児童・生徒の指導や授業の質にも影響している
 - 「互いに助け合う協力的な学校文化がある」は7～8割台（p.34）
 - 「主体的・対話的で深い学びを進める時間的な余裕がない」は6～8割台、「指導すべき学習内容が多くて授業で教えきれない」は5～6割台（p.33）
 - 「児童・生徒と向き合う時間がとれない」は5割前後（p.35）

調査概要

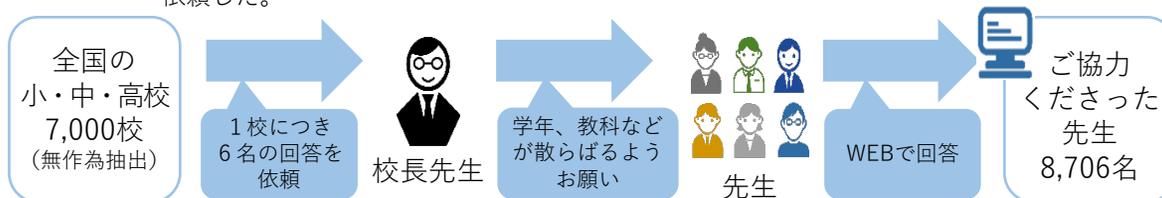
- **調査テーマ** GIGAスクール構想3年目における小・中・高校の学習指導の実態と教員の意識
- **調査時期** 2023年8月末～9月中旬
- **調査対象** 全国の公立の小学校・中学校および国公私立の高等学校の教員

学校段階	調査年	学校			教員		
		発送数	有効回収数	有効回収率 (%)	最大配布数	有効回収数	有効回収率 (%)
小学校	2020年	2,000	450	22.5	12,000	1,218	10.2
	2021年	3,000	737	24.6	18,000	2,125	11.8
	2022年	3,000	932	31.1	18,000	2,884	16.0
	2023年	3,000	943	31.4	18,000	3,012	16.7
中学校	2020年	2,000	733	36.7	12,000	2,151	17.9
	2021年	2,000	719	36.0	12,000	2,264	18.9
	2022年	2,000	769	38.5	12,000	2,413	20.1
	2023年	2,000	777	38.9	12,000	2,450	20.4
高校	2021年	2,000	895	44.8	12,000	3,214	26.8
	2022年	2,000	942	47.1	12,000	3,153	26.3
	2023年	2,000	944	47.2	12,000	3,244	27.0

※2020～2022年は各年に行った同様の調査。p.6以降で経年比較に用いている。

※抽出方法・条件

- ・学校抽出：全国の小学校、中学校、高等学校のリストより、都道府県の教員数に応じた抽出確率で無作為に抽出。
- ・教員抽出：小学校は学級担任をしている教員、中学校は国語・社会・数学・理科・外国語のいずれかを担当している教員、高校は国語・地理歴史・公民・数学・理科・外国語のいずれかを担当している教員を調査対象とした。
校長先生に対して、担当学年、担当教科、年齢、性別を考慮した各学校6名の教員の抽出を依頼した。



- **調査方法** 郵送による依頼：校長先生に対して、1校につき6名の教員に回答いただくよう依頼
WEBによる回答：依頼を受けた教員はWEB画面にアクセスして回答

● 調査項目

《共通》 1人1台端末の導入・利用環境／授業などでのICT機器の活用／1人1台端末（ICT機器）の効果と影響／GIGAスクール構想の実現度／教科の授業方法／外国語の指導と評価／学習履歴の活用／定期試験の内容・回数（中・高校のみ）／児童・生徒の様子／指導観／児童・生徒の資質・能力の育成／指導・組織・仕事に関する意識など

《小・中学校》 宿題／1人1台端末の家庭での活用など

《高校》 探究活動のテーマ・内容／進路指導の実態・課題など

● その他に用いた調査

p.29では、長期的変化をみるために、ベネッセ教育総合研究所「学習指導基本調査」（第5回調査：2010年、第6回調査：2016年）の結果との比較を行っている。この調査の抽出方法・条件は今回の調査と同様であるが、校長先生の依頼を受けた教員が紙のアンケート用紙に回答している点で今回の調査と違いがあり、留意が必要である。

基本属性

※2023年の調査対象者（教員、有効回収数）の構成比率を、横の合計が100%になるように示している。

● 地域 (%)

	北海道	東北	北関東	南関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄
小学校	4.1	7.5	10.8	25.5	19.8	12.4	5.6	3.2	11.2
中学校	3.8	7.4	11.8	21.8	16.5	13.1	6.7	3.3	15.6
高校	4.3	7.2	8.9	18.8	20.9	13.3	6.9	4.0	15.5

● 設置区分 (%)

	国立	公立	私立
高校	0.4	75.6	24.0

● 学科 (%)

	普通科	職業学科	その他の 専門学科	総合学科
高校	77.3	12.2	2.9	7.6

※小・中学校は「公立」のみ（p.4参照）。

※「もっとも多く授業を担当している学科」への回答。職業学科は、農業、工業、商業、水産、家庭、看護、情報、福祉の合計。その他の専門学科は、理数、外国語・国際、音楽・美術、体育、探究、その他の合計。

● 大学進学率（学校タイプ） (%)

	30%未満 (進路多様校)	30~50%未満 (中堅校B)	50~70%未満 (中堅校A)	70~90%未満 (進学校B)	90%以上 (進学校A)
高校全体	30.4	13.9	13.6	19.9	22.2
普通科	19.1	13.9	15.5	24.6	26.8

※卒業生の進路について「(4年制大学進学者割合×100)/(100-進路未定・不明者の割合)」で算出した。

● 教職経験年数 (%)

	5年目以下	6~10年目	11~20年目	21~30年目	31年目以上
小学校	22.4	23.9	31.7	12.6	9.4
中学校	24.2	22.8	28.3	13.8	10.8
高校	16.1	18.9	30.9	20.2	13.9

● 担当学年 (%)

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	その他
小学校	14.9	15.5	14.7	14.8	16.1	16.4	7.6
中学校	28.9	27.6	29.9				13.6
高校	30.6	33.0	36.4				

※小学校は、各学年の学級担任をしている教員。「その他」は複式学級を担当している教員や学級担任をしていない教員など。
 ※中学校は、各学年の学級担任・副担任をしている教員。「その他」は学級担任・副担任をしていない教員。
 ※高校は、「もっとも多く授業を担当している学年」への回答。

● 担当教科 (%)

	国語	社会	数学	理科	外国語	その他
中学校	16.7	17.1	24.1	18.6	18.8	4.7
高校	17.5	14.1(地理歴史) 6.7(公民)	22.1	17.4	19.0	3.2

※複数の教科を担当している場合は、主なものを回答。

■ データの偏りについて

地域および設置区分に関して、文部科学省「学校基本調査」(小学校・公立、中学校・公立、高校・国公立 <全日制>の本務者、2023年データ)との比較において、おおむねバランスよく回収できている。

■ データに関する留意点

- 「全体」の比率(全体値)は、調査対象(教員)を抽出する際(p.4参照)に対象としていなかった、小学校で学級担任をしていない教員(担当学年を「その他」と回答)、および、中・高校で担当教科が国語、社会(地理歴史、公民)、数学、理科、外国語でない教員(担当教科を「その他」と回答)も含めた総数で割って求めている。
- 本報告書で使用している百分率(%)は、各項目の算出方法に沿って出した値の小数点第2位を四捨五入して表示している。その結果、数値の和が100にならない場合がある。
- 経年比較において、比率に5ポイント以上の差がある場合に赤色の矢印を付けている。
- 「小学校低学年」は小学1~3年生、「小学校高学年」は小学4~6年生の学級担任をしている教員による回答を表している。

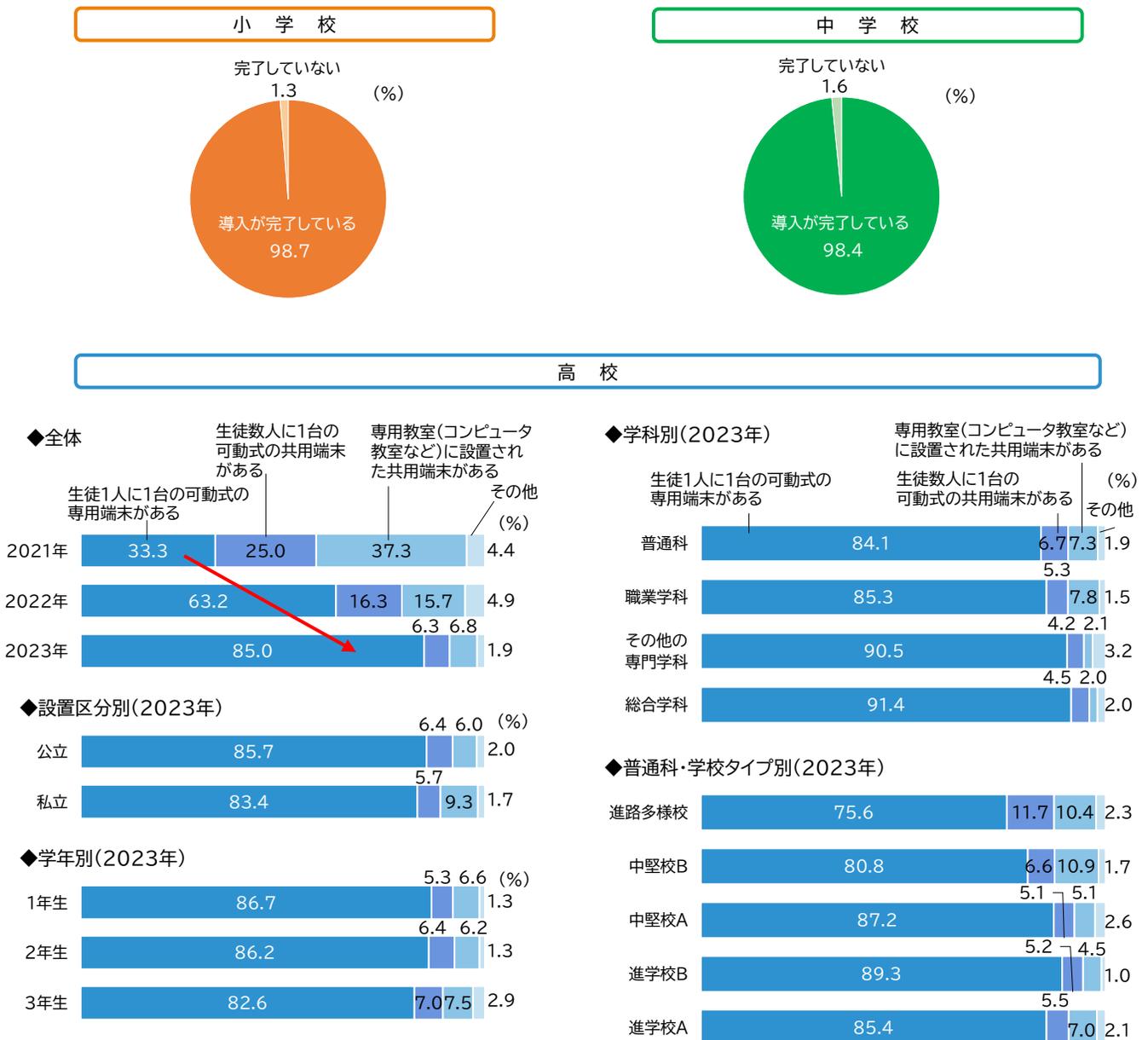
1人1台端末の導入状況

小・中学校はほぼ100%、高校は85%

1人1台端末の導入は、小・中学校では、ほぼ100%が完了している。一部、完了していない学校があるのは、端末の故障などのためだと考えられる。高校は、2021年からの2年間で導入が進みつつあり、2023年には85%になった（「生徒1人に1台の可動式の専用端末がある」）。ただし、普通科の学校タイプ別（p.5参照）では、進路多様校や中堅校Bで導入の遅れがみられ、さらなる整備が望まれる。

- Q 貴校について、次のようなことはあてはまりますか。
 ——「1人1台端末(パソコンやタブレットなど)の導入が完了している」(小・中学校)
 Q 生徒のICT機器(端末)の利用環境について、もっとも近いものを1つ選んでください。(高校)

図1-1 1人1台端末の導入状況(2023年)



※「導入が完了している」は、質問に「あてはまる」と回答した教員、「完了していない」は「あてはまらない」と回答した教員（小・中学校）。
 ※高校の「全体」のみ、2021年、2022年の数値を示している。設置区分、学年、学科、普通科の学校タイプはp.5参照。

デジタル教科書の導入状況

ここ1年間では、高校の指導者用の導入率が高まっている

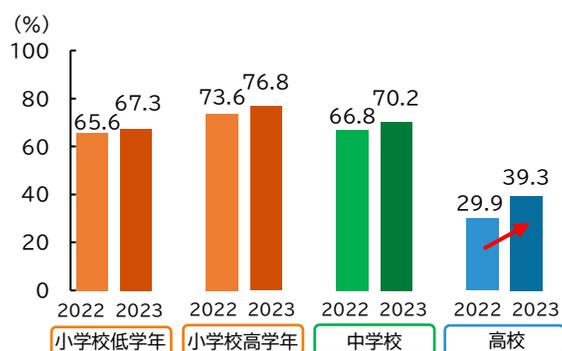
デジタル教科書の導入率は、小学校高学年で高いが、ここ1年間の変化は小さい（図1-2）。中・高校では教科による差がみられ、外国語での導入率が高いが、ここ1年間では、中学校は、数学（指導者用・学習者用）、外国語（学習者用）で、高校は、外国語以外の教科（指導者用）で、導入率が高まっている（図1-3）。

Q 貴校について、次のようなことはあてはまりますか。

- 「あなたが主に担当する学年の教科で、指導者用デジタル教科書が導入されている」
- 「あなたが主に担当する学年の教科で、学習者用デジタル教科書が導入されている」

図1-2 デジタル教科書の導入状況(2023年)

① 指導者用



② 学習者用

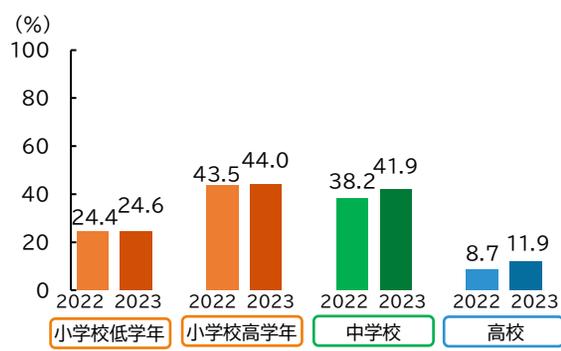
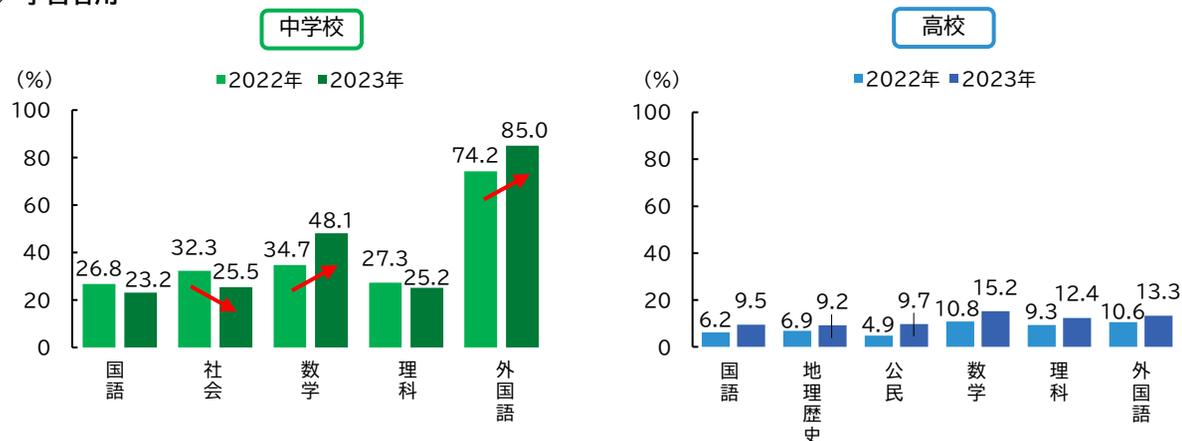


図1-3 デジタル教科書の導入状況(2023年、教科別)

① 指導者用



② 学習者用



※「あてはまる」の% (図1-2~3)。

※小学校教員は担当する学年について、中・高校教員は担当する学年の教科について回答している (図1-2~3)。

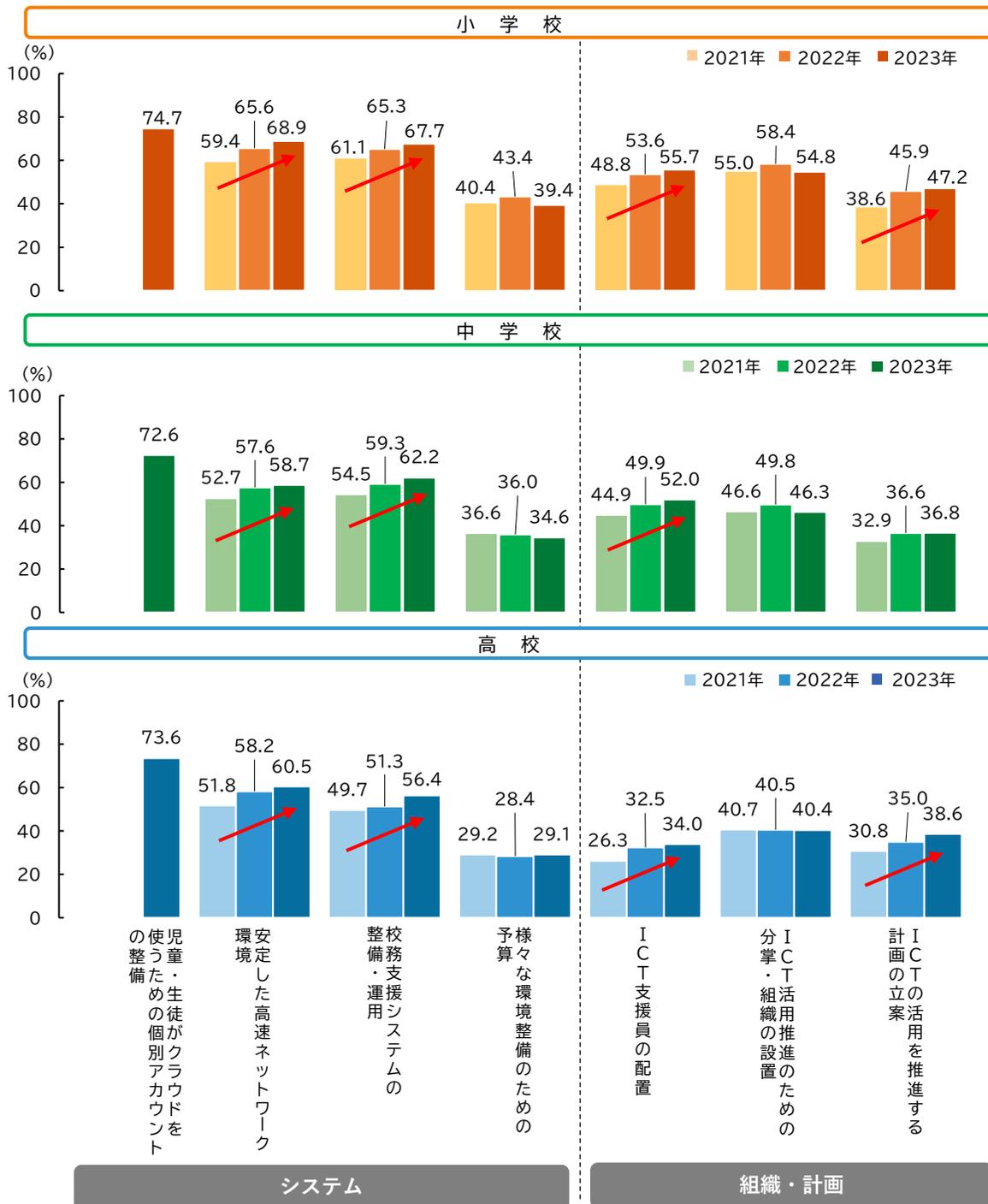
1人1台端末の利用環境の充実度（1/2）

利用環境の充実度は、ここ1年間では微増にとどまる

1人1台端末の利用環境をみると、2021年からの2年間で、「安定した高速ネットワーク環境」「校務支援システムの整備・運用」「ICT支援員の配置」などの充実度が徐々に高まっているが、ここ1年間での変化は微増にとどまる。システム、組織・計画について、ここ1年間で5ポイント以上増加したのは、高校の「校務支援システムの整備・運用」のみである。ICT活用を進めるためには、利用環境のさらなる充実が求められる。

Q 1人1台端末を活用した教育を推進していくうえで、次のこと(16項目)はどれくらい充実していますか。

図1-4 1人1台端末の利用環境の充実度(経年比較)



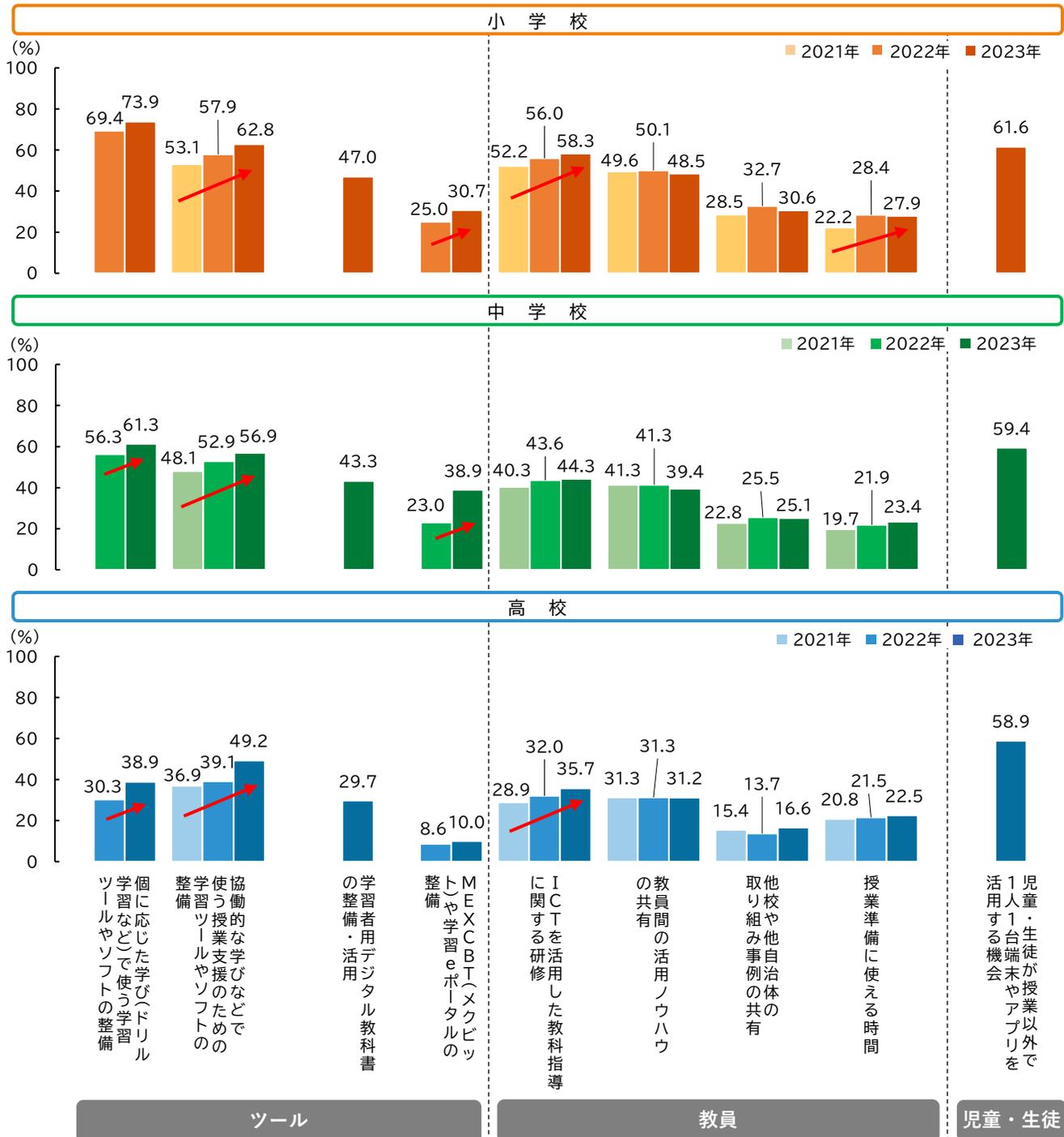
※高校は「ICT機器を活用した教育」について尋ねている（図1-4、図1-4つづき）。
 ※「児童・生徒がクラウドを使うための個別アカウントの整備」は2021年、2022年は尋ねていない。
 ※「とても充実している」+「まあ充実している」の%。

1人1台端末の利用環境の充実度 (2/2)

「ツール」については、「学習ツールやソフト」の整備、小・中学校では「MEXCBT（メクビット）」の整備などの充実度が、ここ1～2年間で高まっている。一方で、教員の「研修」、ノウハウや事例の「共有」、「授業準備に使える時間」については、ここ1年間での変化が小さく、さらなる充実が求められる。今回初めて尋ねた「児童・生徒が授業以外で1人1台端末やアプリを活用する機会」の充実度は、小・中・高校とも6割前後で、多くの学校では、授業以外でも児童・生徒のICT活用が進められていることがわかる。

Q 1人1台端末を活用した教育を推進していくうえで、次のこと(16項目)はどれくらい充実していますか。

図1-4つづき 1人1台端末の利用環境の充実度(経年比較)



※「個人に応じた学びで使う学習ツールやソフトの整備」「MEXCBTや学習eポートルの整備」は2021年は尋ねていない。「学習者用デジタル教科書の整備・活用」「児童・生徒が授業以外で1人1台端末やアプリを活用する機会」は2021年、2022年は尋ねていない。「協働的な学びなどで使う授業支援のための学習ツールやソフトの整備」の2021年の数値は「学習ツールやソフトの整備」と尋ねたもの。

※「とても充実している」+「まあ充実している」の%。

教員の授業でのICT機器の活用頻度

半分以上の授業でICT機器を活用する教員は、小学校高学年で89%

教員が授業でICT機器を活用する頻度は、小・中・高校とも、2021年からの2年間で大幅に高まっている。半分以上の授業（「毎回の授業」～「半分程度の授業」）で活用している教員の比率は、2023年は、小学校高学年が89%、高校でも72%である。その内訳をみると、小学校では「7～8割程度の授業」で、中・高校では「毎回の授業」で活用している教員が多い（図1-5）。端末の利用環境の充実度との関連をみると、小学校高学年では、「ICTの活用を推進する計画の立案」「ICTを活用した教科指導に関する研修」などが充実しているほど、教員が授業でICT機器を活用する頻度が高い（図1-6）。他の学校段階でも同様の傾向がみられる。

Q あなたは授業のなかでICT機器をどれくらいの頻度で使用していますか。
 ——「あなた(教員)がICT機器を使って指導すること」

図1-5 教員の授業でのICT機器の活用頻度(経年比較、学校段階別)

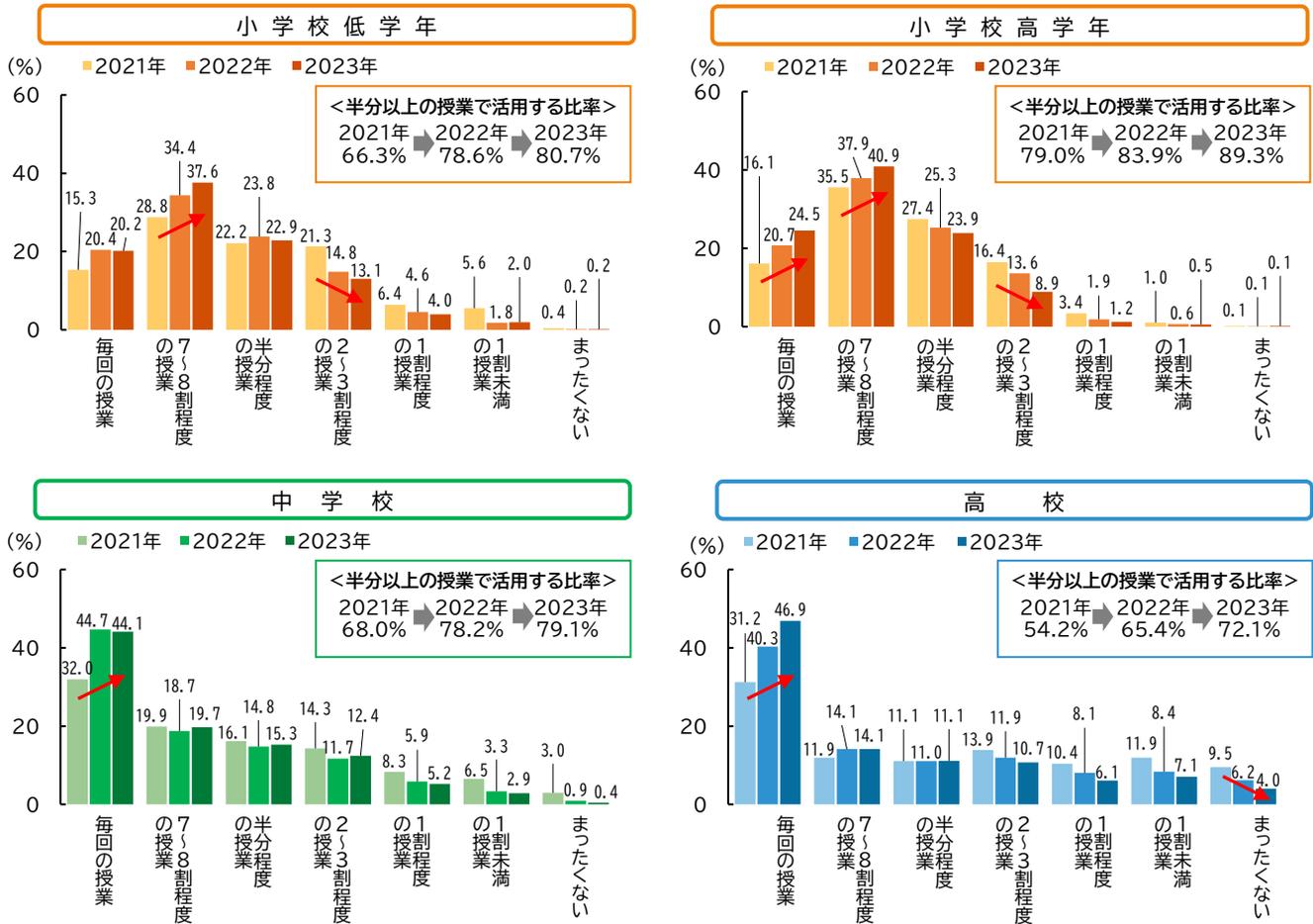
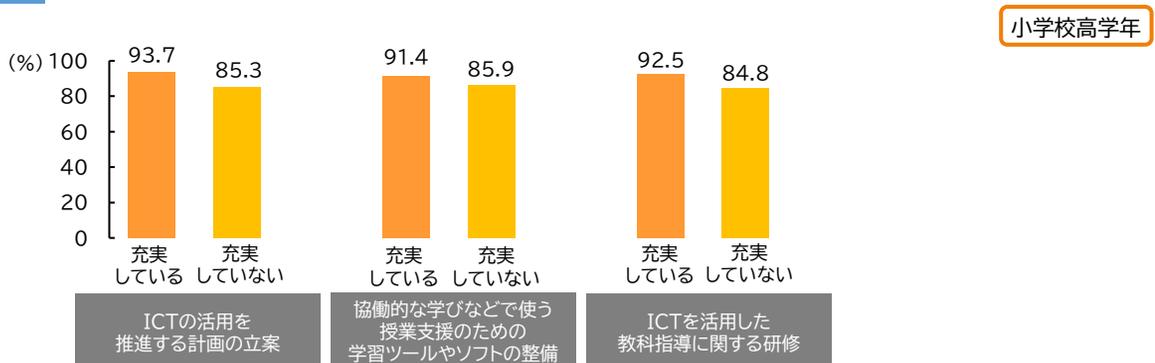


図1-6 教員の授業でのICT機器の活用頻度<半分以上の授業で活用する比率>(端末の利用環境の充実度別)



※「半分以上の授業で活用する比率」は、「毎回の授業」+「7～8割程度の授業」+「半分程度の授業」の%（図1-5、図1-6）。
 ※端末環境の充実度は、p.8-9の項目を使用。「充実している」は「とても充実している」「まあ充実している」と回答した教員、「充実していない」は「あまり充実していない」「まったく充実していない」と回答した教員（図1-6）。

児童・生徒の授業でのICT機器の活用頻度

半分以上の授業でICT機器を活用している児童は、小学校高学年で74%

児童・生徒が授業でICT機器を活用する頻度は、小・中・高校とも、2021年からの2年間で大幅に高まっている。半分以上の授業（「毎回の授業」～「半分程度の授業」）で活用している比率は、2023年は、小学校高学年が74%、小学校低学年でも43%である。その内訳をみると、小学校高学年では「半分程度の授業」で、小学校低学年、中・高校では「2～3割程度の授業」で活用している比率が高い（図1-7）。端末の利用環境の充実度との関連をみると、小学校高学年では、「ICTの活用を推進する計画の立案」「教員間の活用ノウハウの共有」「児童が授業以外で1人1台端末やアプリを活用する機会」などが充実しているほど、児童・生徒がICT機器を活用する頻度が高い（図1-8）。他の学校段階でも同様の傾向がみられる。

Q あなたは授業のなかでICT機器をどれくらいの頻度で使用していますか。
 ——「児童・生徒がICT機器を使って学ぶこと」

図1-7 児童・生徒の授業でのICT機器の活用頻度（経年比較、学校段階別）

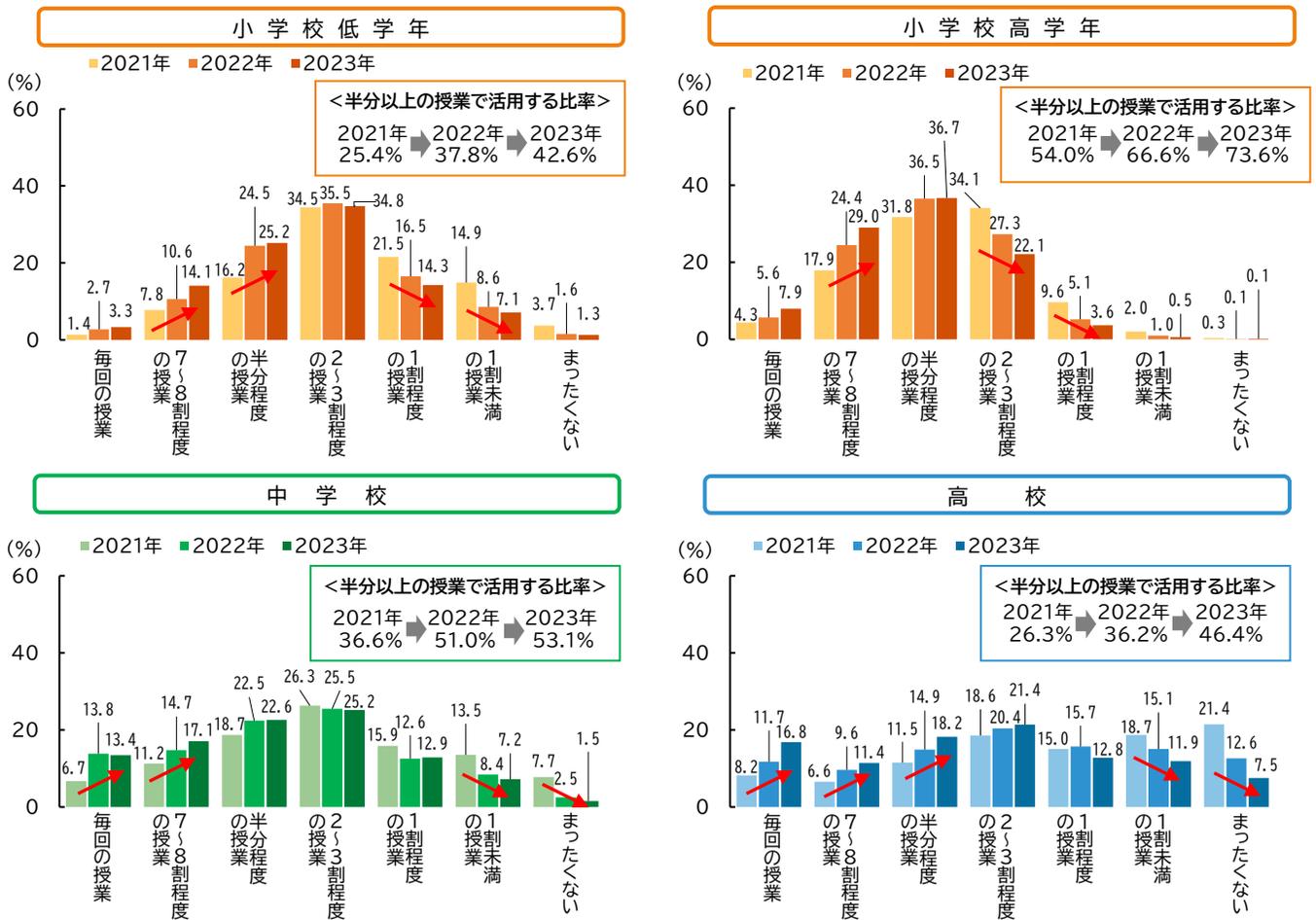
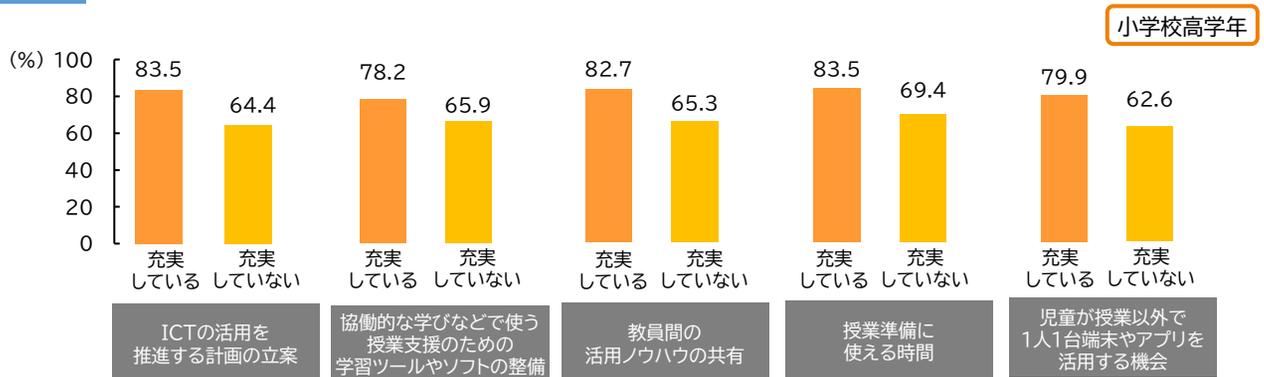


図1-8 児童・生徒の授業でのICT機器の活用頻度＜半分以上の授業で活用する比率＞（端末の利用環境の充実度別）



※「半分以上の授業で活用する比率」は、「毎回の授業」＋「7～8割程度の授業」＋「半分程度の授業」の％（図1-7、図1-8）。
 ※端末環境の充実度は、p.8-9の項目を使用。「充実している」は「とても充実している」「まあ充実している」と回答した教員、「充実していない」は「あまり充実していない」「まったく充実していない」と回答した教員（図1-8）。

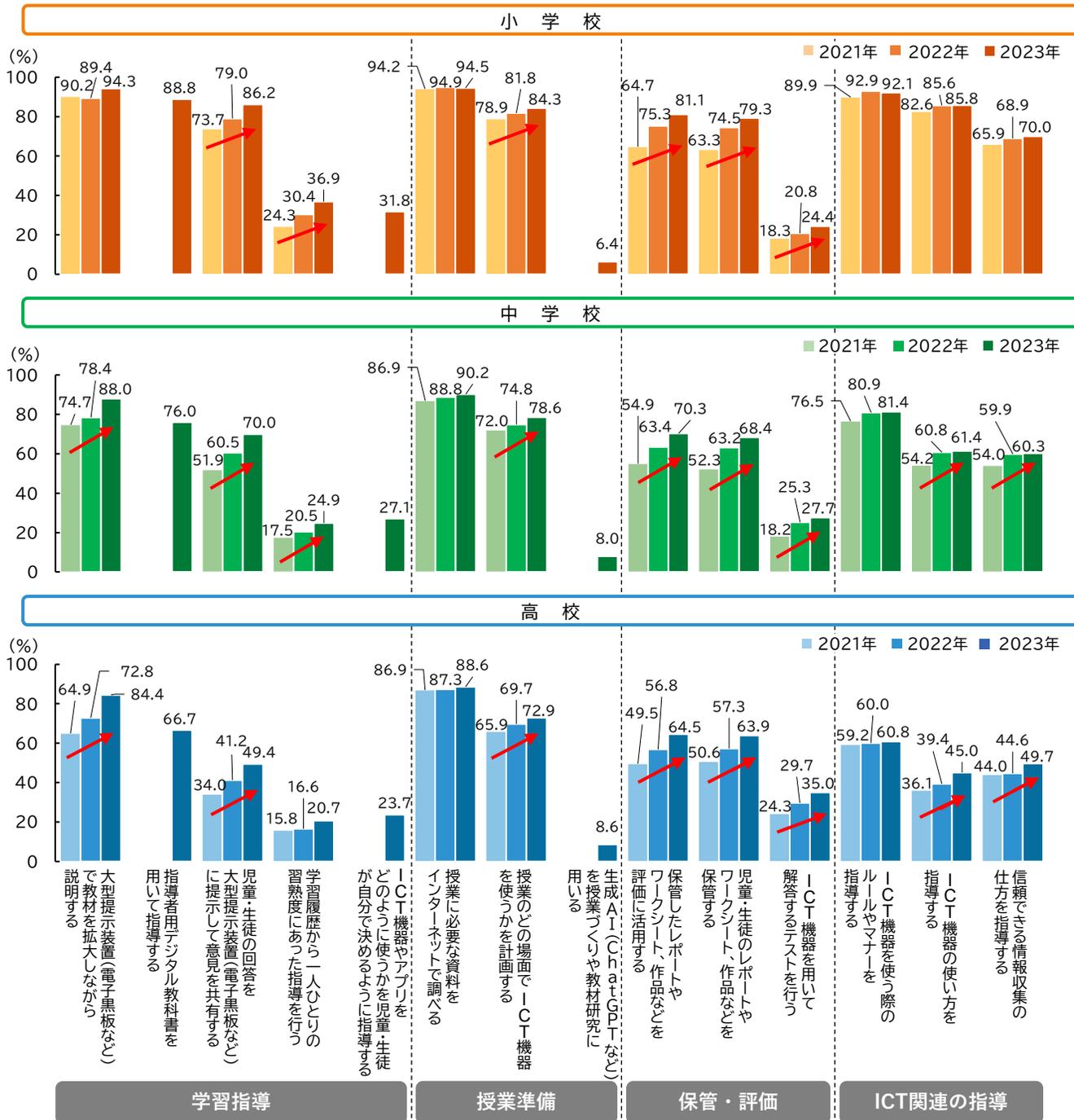
教員のICT機器の活用内容

児童・生徒の意見の共有や評価への活用が増加

教員がICT機器を活用する場面は増加している。なかでも、2022年からの1年間で、小・中・高校ともに比率が高まっているのは、「児童・生徒の回答を大型提示装置（電子黒板など）に提示して意見を共有する」、児童・生徒のレポートなどを「評価に活用する」である。高校では、ここ1年間で比率が高まった項目が多い。また、今回初めて尋ねた「ICT機器やアプリをどのように使うかを児童・生徒が自分で決めるように指導する」の比率は、小学校が3割台、中・高校が2割台で、児童・生徒が使い方を決定する機会も設けられ始めている。「生成AIを授業づくりや教材研究に用いる」は1割未満である。

あなたは、ICT機器を活用して、次のような学習指導(14項目)をどれくらい行っていますか。

図1-9 教員のICT機器の活用内容(経年比較)



※「あなた（教員）がICT機器を使って指導すること」の頻度を尋ねた質問（p.10）に「毎回の授業」～「1割未満の授業」と回答した教員のみ。の回答。
 ※「指導者用デジタル教科書を用いて指導する」「ICT機器やアプリをどのように使うかを児童・生徒が自分で決めるように指導する」「生成AI（ChatGPTなど）を授業づくりや教材研究に用いる」は2021年、2022年は尋ねていない。
 ※項目中の「大型提示装置（電子黒板など）」は、2021年、2022年は「電子黒板など」としている。
 ※「よく行っている」+「ときどき行っている」の%。

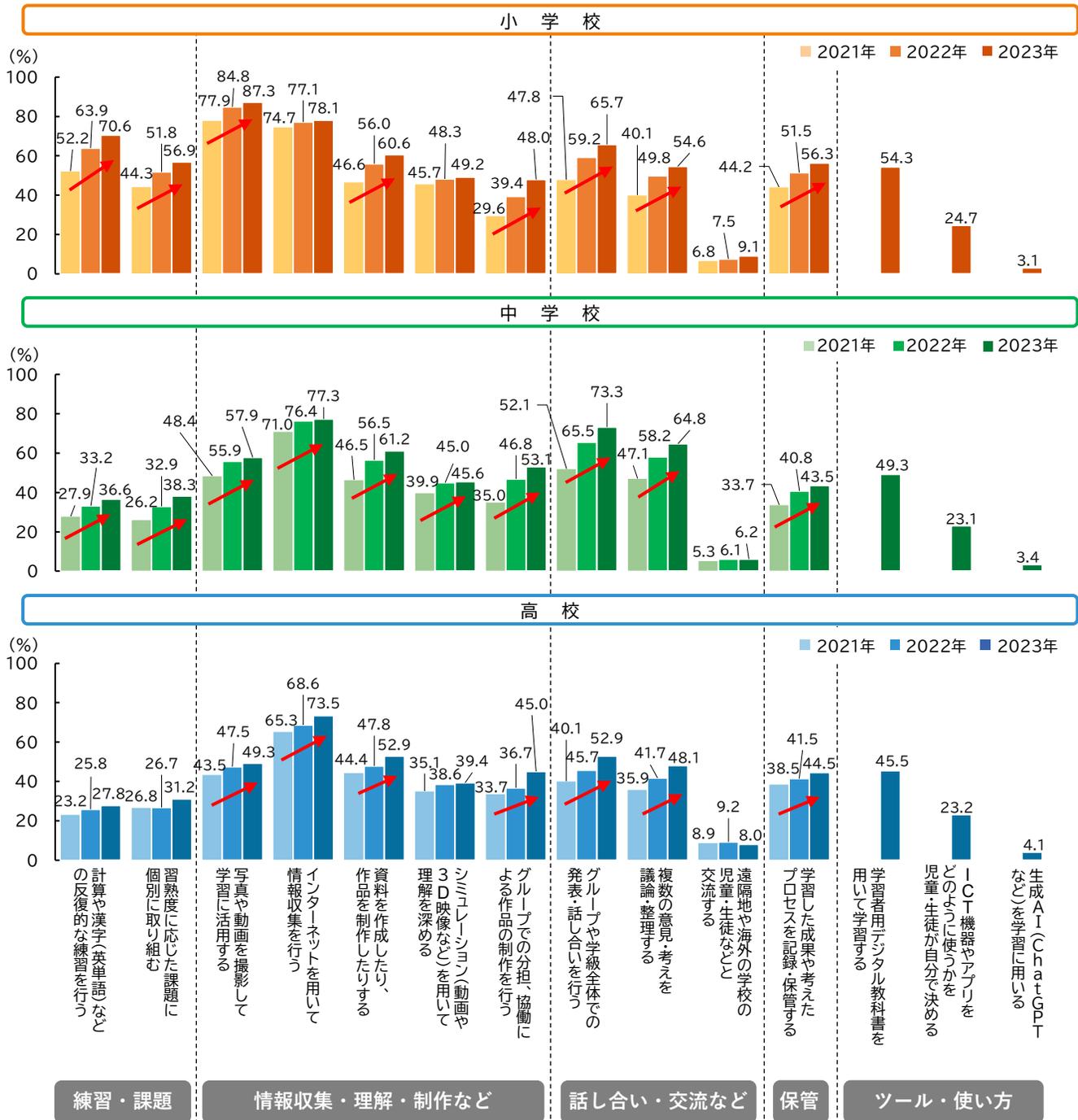
児童・生徒のICT機器の活用内容

協働的な学習とともに、個別の学習への活用も増加

児童・生徒がICT機器を活用する場面も増加している。なかでも、2022年からの1年間で、小・中・高校ともに比率が高まっているのは、「グループでの分担、協働による作品の制作を行う」「グループや学級全体での発表・話し合いを行う」であり、協働的な学習への活用が進んでいる。一方で、小・中学校では、「反復的な練習を行う」「習熟度に応じた課題に個別に取り組む」の比率も高まっており、個別の学習への活用も進められている。また、今回初めて尋ねた「ICT機器やアプリをどのように使うかを児童・生徒が自分で決める」の比率は、小・中・高校とも2割台であった。

Q あなたは、ICT機器を活用して、次のような学習指導(14項目)をどれくらい行っていますか。

図1-10 児童・生徒のICT機器の活用内容(経年比較)



※「児童・生徒がICT機器を使って学ぶこと」の頻度を尋ねた質問 (p.11) に「毎回の授業」～「1割未満の授業」と回答した教員のみの回答。
 ※「学習者用デジタル教科書を用いて学習する」「ICT機器やアプリをどのように使うかを児童・生徒が自分で決める」「生成AI(ChatGPTなど)を学習に用いる」は2021年、2022年は尋ねていない。
 ※小学校は「計算や漢字などの反復的な練習を行う」、中・高校は「計算や英単語などの反復的な練習を行う」と尋ねている。
 ※「よく行っている」+「ときどき行っている」の%。

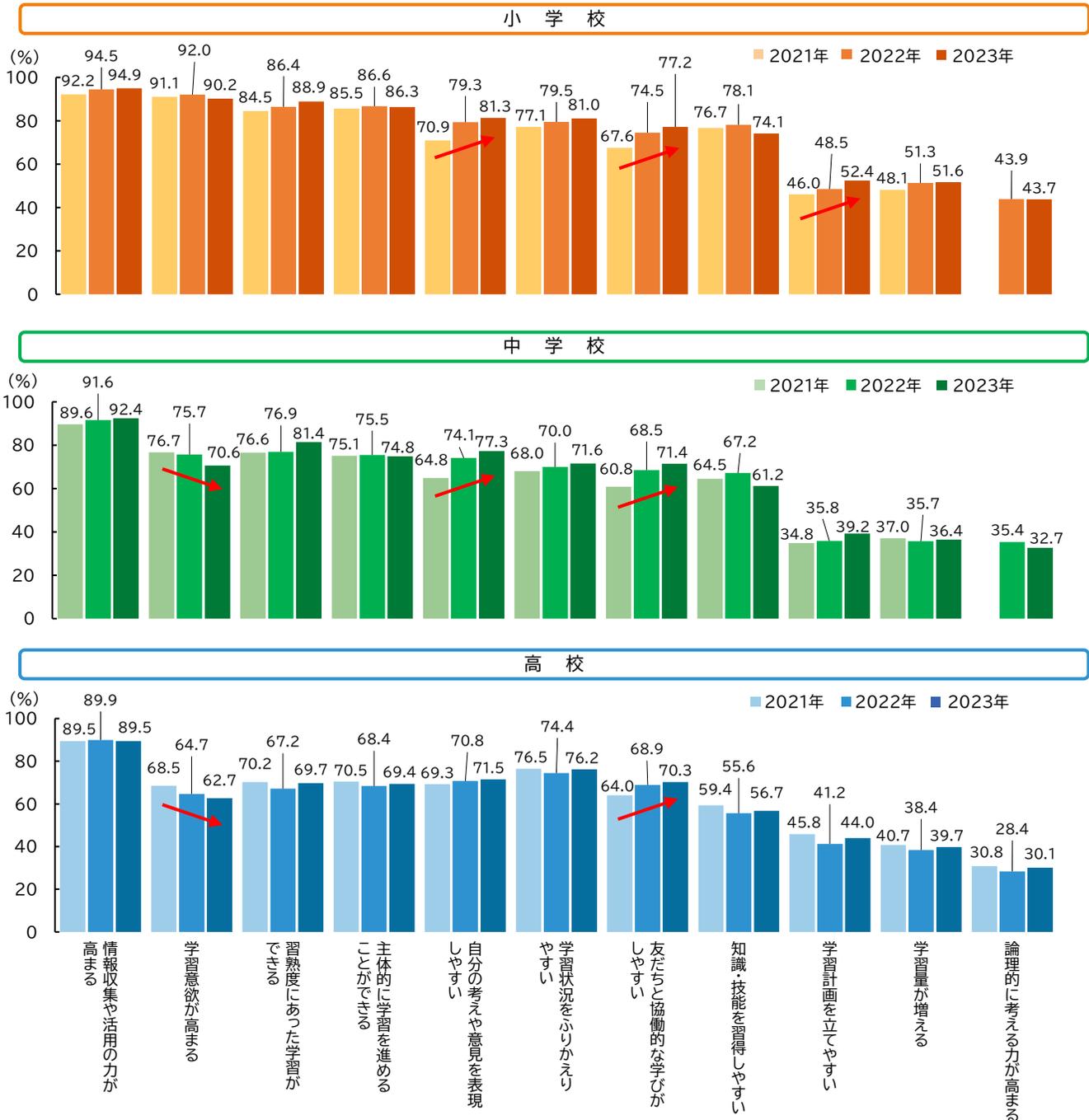
児童・生徒にとっての1人1台端末の効果

意見の表現のしやすさや協働的な学びへの効果実感が高まっている

1人1台端末を使った学習のプラス面として、小・中学校では、2021年からの2年間で、「自分の考えや意見を表現しやすい」「友だちと協働的な学びがしやすい」が10ポイント程度増加し、高校でも「友だちと協働的な学びがしやすい」が5ポイント以上増加している。一方、中・高校では「学習意欲が高まる」がここ2年間で、また、中学校では「知識・技能を習得しやすい」が、ここ1年間で5ポイント以上減少している。「学習意欲が高まる」は、小学校では約9割と高い水準を保っているが、1人1台端末によって学習意欲や知識・技能などの資質・能力を高めることは、決して容易ではないことがうかがえる。

Q 1人1台端末を使った学習は、児童・生徒にとってどのような効果があると思いますか。

図1-11 児童・生徒にとっての1人1台端末の効果(経年比較)



※高校は「ICT機器を使った学習」について尋ねている。
 ※小・中学校は、1人1台端末の「導入が完了している(あてはまる)」と回答した教員のみの回答。
 ※「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

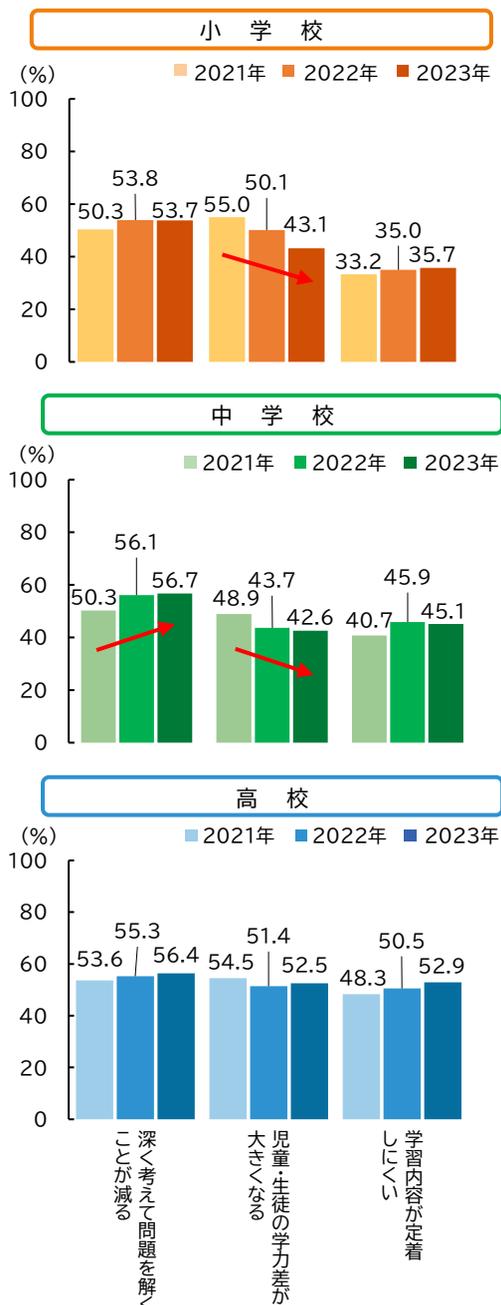
児童・生徒にとっての1人1台端末の影響

「学力差が大きくなる」は減少、
「深く考えて問題を解くことが減る」は5割強

「児童・生徒の学力差が大きくなる」は、ここ2年間で、小学校で10ポイント以上、中学校で5ポイント以上減少しており、1人1台端末の活用が学力差を拡大させる懸念は弱まっていると考えられる。一方で、「深く考えて問題を解くことが減る」は、小・中・高校とも5割強のままであり、懸念される。

Q 1人1台端末を使った学習は、児童・生徒にとってどのような影響があると思いますか。

図1-11 児童・生徒にとっての1人1台端末の影響(経年比較)



※高校は「ICT機器を使った学習」について尋ねている。
 ※小・中学校は、「1人1台端末の「導入が完了している(あてはまる)」と回答した教員のみ」の回答。
 ※「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

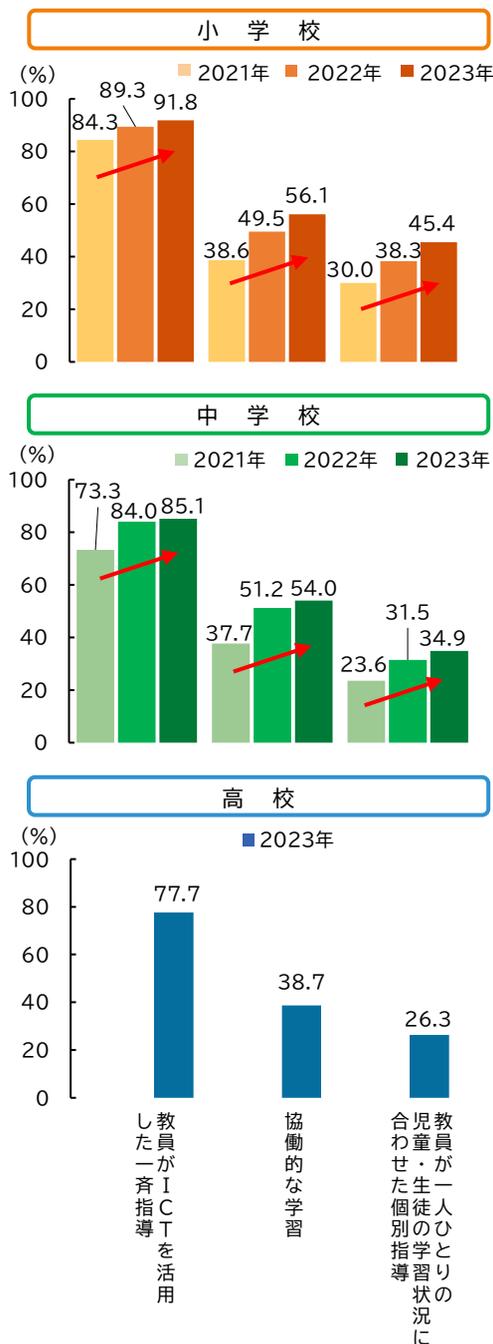
教員が捉えるGIGAスクール構想の実現度

「協働的な学習」や「個別指導」の実現度が高まっている

GIGAスクール構想がどれくらい実現しているかを、学習・指導の形態別に尋ねたところ、小学校では「一斉指導」がもっとも高く9割を超えている。「協働的な学習」と「個別指導」は5割前後であるが、ここ2年間で15ポイント以上増加している。中・高校では、いずれも小学校ほど実現度は高くないが、傾向は共通している。

Q 1人1台端末を活用した学習指導について、あなたは現在どれくらい実現していると思いますか。

図1-12 GIGAスクール構想の実現度(経年比較)



※高校は2021年、2022年は尋ねていない。
 ※「かなり実現している」+「まあ実現している」の%。

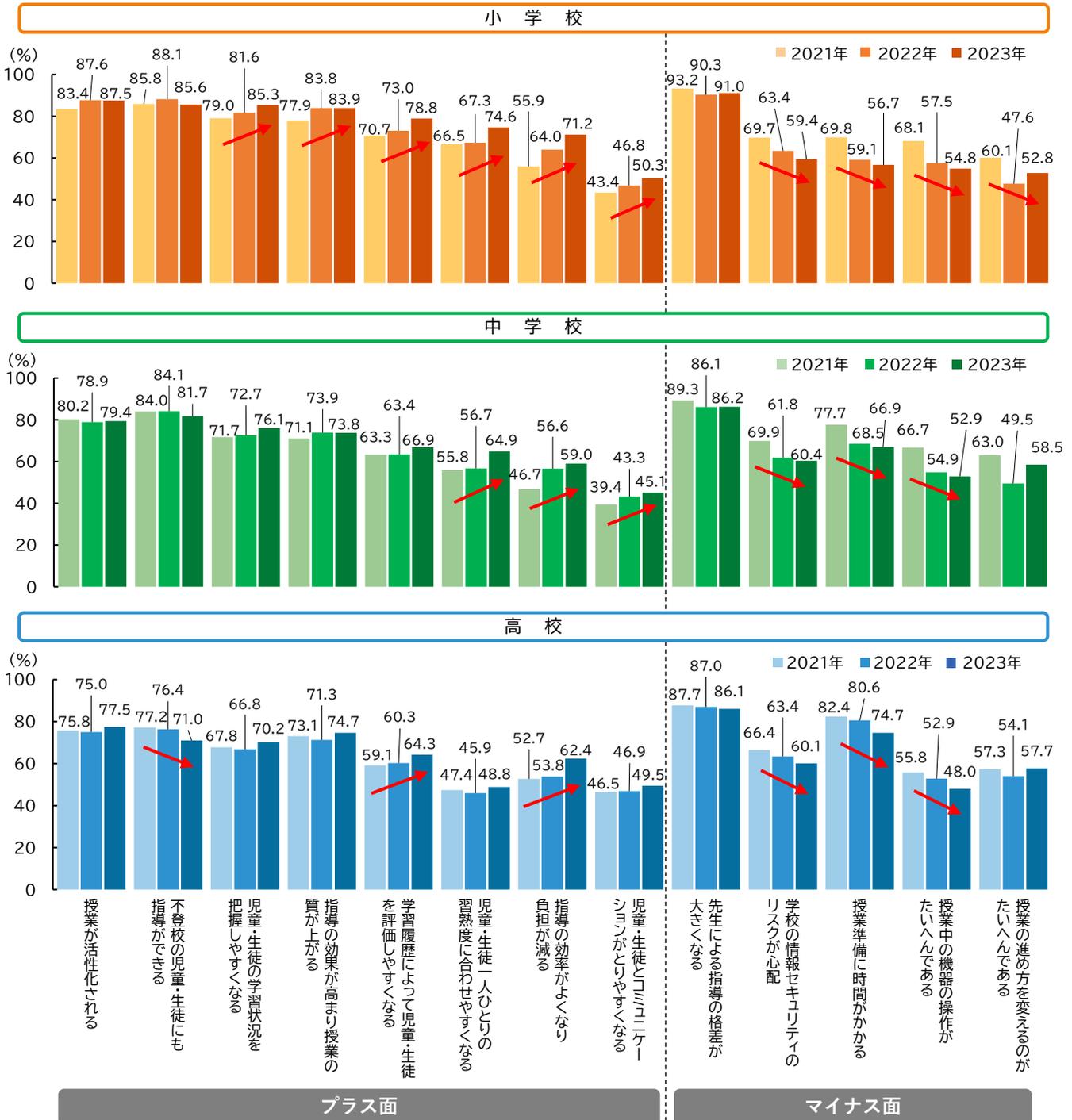
教員にとっての1人1台端末の効果・影響

教員は、評価のしやすさ、習熟度に合わせて指導、指導の効率化に効果を感じている

1人1台端末の教員の指導にとってのプラス面として、2021年からの2年間で大きく増加しているのは、「学習履歴によって児童・生徒を評価しやすくなる」(小・高校)、「一人ひとりの習熟度に合わせてやすくなる」(小・中学校)、「指導の効率がよくなり負担が減る」(小・中・高校)である。学校段階によって効果が多少異なるようだ。一方、マイナス面をみると、小・中学校では、「授業の進め方を変えるのがたいへんである」が、2022年に減少し、2023年に再び増加した。端末の導入が一段落し、授業の進め方を再考する状況にあるのかもしれない。

Q 1人1台端末を使った学習は、教員の指導にとってどのような効果や影響があると思いますか。

図1-13 教員にとっての1人1台端末の効果・影響(経年比較)



※高校は「ICT機器を使った学習」について尋ねている。
 ※小・中学校は、「1人1台端末の導入が完了している(あてはまる)」と回答した教員のみを回答。
 ※「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

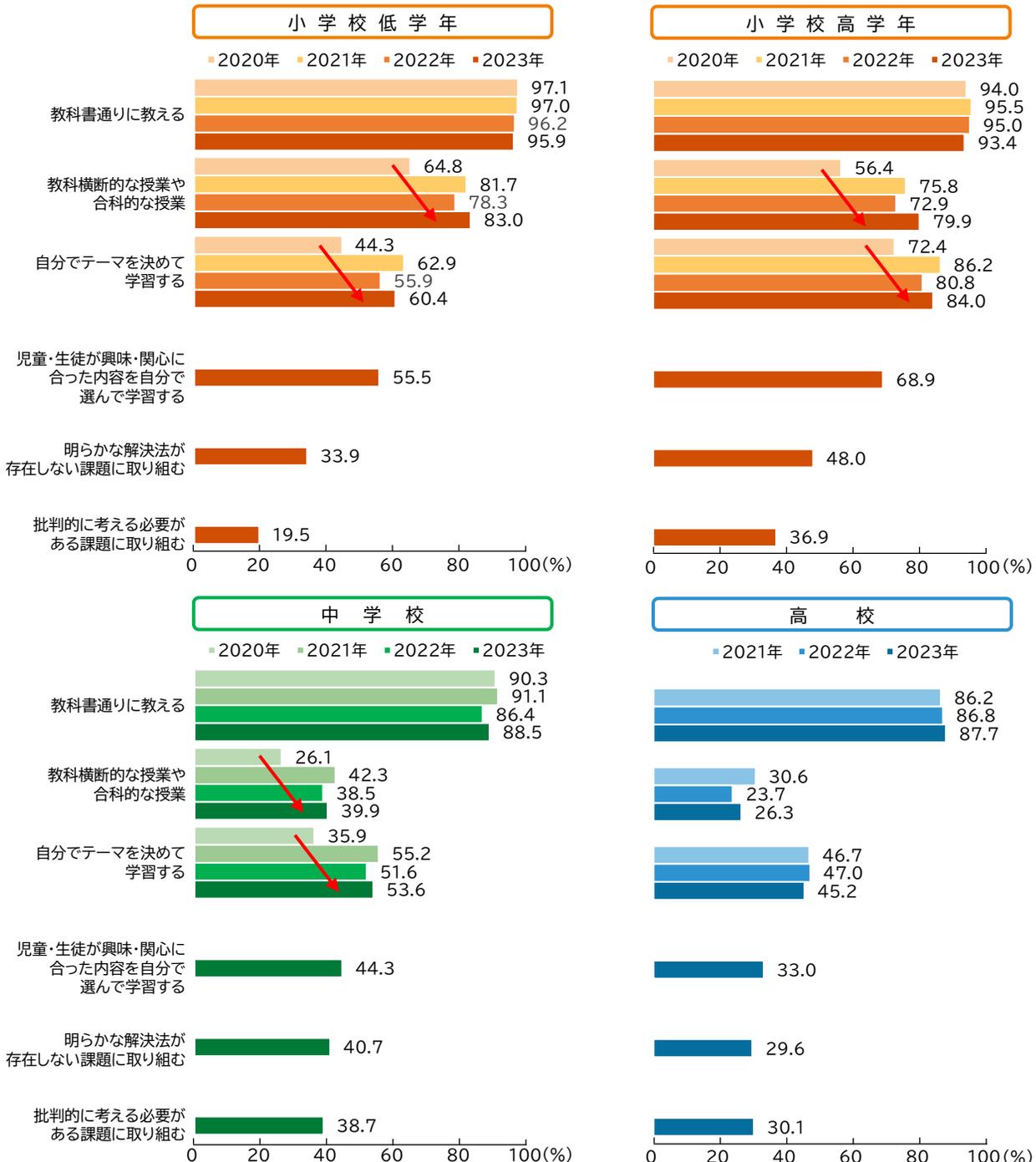
教科の授業内容

児童・生徒が「内容を自分で選んで学習する」は、小学校高学年で69%

教科の授業内容は、「教科書通りに教える」の比率が高く、小学校で9割台、中・高校で8割台である。2020年から2023年にかけての変化をみると、小・中学校では、「教科横断的な授業や合科的な授業」「児童・生徒が自分でテーマを決めて学習する」の比率が高まっているが、年による増減がある。今回初めて尋ねた「児童・生徒が興味・関心に合った内容を自分で選んで学習する」の比率は、小学校高学年で69%と高かった。また、「明らかな解決法が存在しない課題に取り組む」「批判的に考える必要がある課題に取り組む」も、小学校高学年の比率がもっとも高かった（48%、37%）。小学校の授業を踏まえ、中・高校でのさらなる取り組みが求められる。

Q あなたは教科の授業において、次のような内容の授業をどれくらい行っていますか。

図2-1 教科の授業内容(経年比較)



※質問項目は、2021年に、わかりやすさを考慮し、比較できる範囲内で文言の変更を行っている。
 ※「児童・生徒が興味・関心に合った内容を自分で選んで学習する」「明らかな解決法が存在しない課題に取り組む」「批判的に考える必要がある課題に取り組む」は2020年～2022年は尋ねていない。
 ※「よく行っている」+「ときどき行っている」の%。

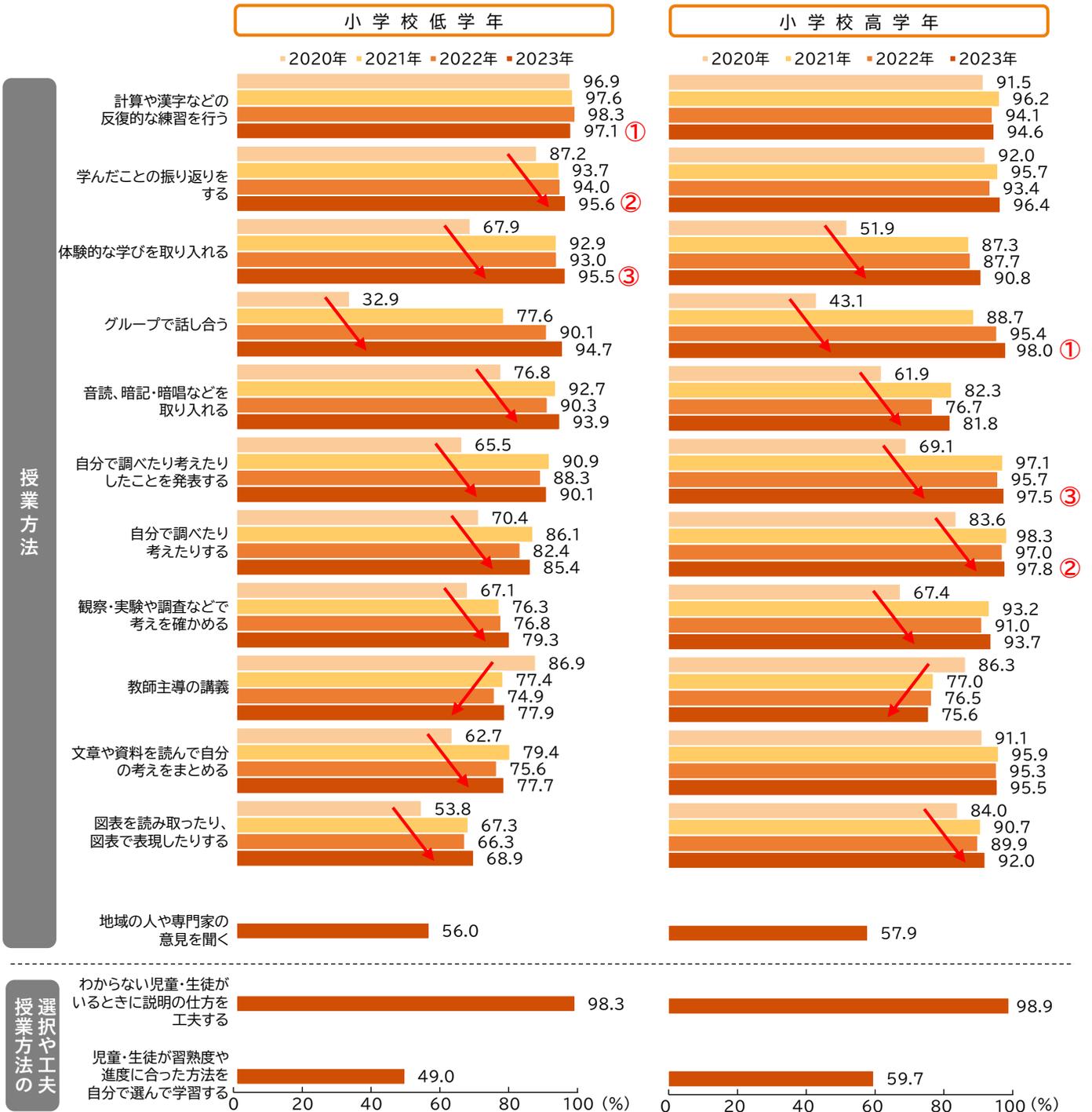
教科の授業方法 (1/2)

ここ3年間で、対話的・活動的な授業が増加
児童が「方法を自分で選んで学習する」は、小学校高学年で60%

小学校では、2020年からの3年間で、「グループで話し合う」「体験的な学びを取り入れる」「自分で調べたり考えたりしたことを発表する」などの対話的・活動的な授業の比率が大幅に高まり、「教師主導の講義」の比率が低下している。コロナ禍の制限緩和に伴うものだけでなく、新学習指導要領の趣旨の実現を目指す動きと考えられる。今回初めて尋ねた「わからない児童・生徒がいるときに説明の仕方を工夫する」の比率は、ほぼ100%と高い。また、「児童・生徒が習熟度や進度に合った方法を自分で選んで学習する」の比率は、小学校高学年が約6割、低学年でも約5割で、児童が自分で学び方を選ぶ機会が比較的多く設けられている。

Q あなたは教科の授業において、次のような方法の授業をどれくらい行っていますか。

図2-2 教科の授業方法(経年比較)



※質問項目は、2021年に、わかりやすさを考慮し、比較できる範囲内で文言の変更を行っている (p.18図2-2、p.19図2-2つづき)。
 ※「地域の人や専門家の意見を聞く」「わからない児童・生徒がいるときに説明の仕方を工夫する」「児童・生徒が習熟度や進度に合った方法を自分で選んで学習する」は2020年～2022年は尋ねていない (p.18図2-2、p.19図2-2つづき)。
 ※「学んだことの振り返りをする」は、2020年～2022年は「振り返ることを取り入れる」と尋ねている。
 ※「よく行っている」+「ときどき行っている」の%。 ※①、②、③は、2023年の比率の上位1～3位を示している。

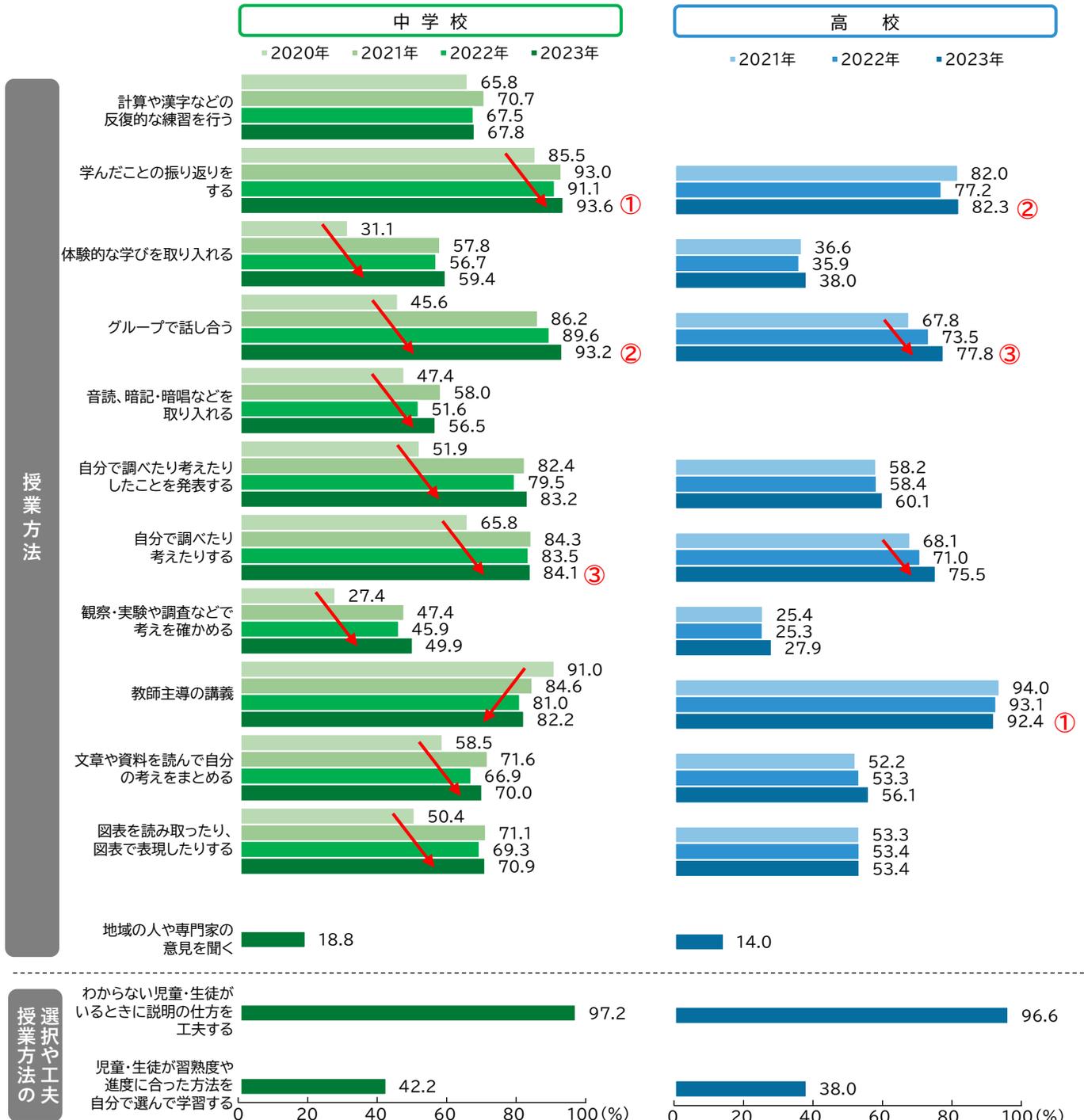
教科の授業方法 (2/2)

高校でも対話的・活動的な授業が増加傾向

中学校は、小学校と同様に、2020年からの3年間で、対話的・活動的な授業の比率が大幅に高まり、「教師主導の講義」の比率が低下している。ただし、ここ1年間の変化は小さい。高校も、1年ごとの変化は小さいが、2021年からの2年間で、「グループで話し合う」「自分で調べたり考えたりする」、2022年からの1年間で「学んだことの振り返りをする」の比率が高まっており、対話的・活動的な授業は、高校でも増加傾向にある。

Q あなたは教科の授業において、次のような方法の授業をどれくらい行っていますか。

図2-2つづき 教科の授業方法(経年比較)



※高校は「計算や漢字などの反復的な練習を行う」「音読、暗記・暗唱などを取り入れる」の2項目を尋ねていない。

※「よく行っている」+「ときどき行っている」の%。

※「学んだことの振り返りをする」は、2020年～2022年は「振り返ることを取り入れる」と尋ねている。

※①、②、③は、2023年の比率の上位1～3位を示している。

高校における探究活動のテーマ

進学校ほど多様なテーマに取り組んでいる

多く取り組まれている探究活動のテーマは、「社会や地域の課題解決」「職業や自己の進路」で、2021年から傾向は変わっていない（図2-3）。普通科の学校タイプ別（p.5参照）にみると、「国際的な社会課題の解決」「自然科学や数学的事象」「文学・言語・歴史・文化・芸術」のテーマは、進学校ほど取り組まれている（表2-1）。教科別にみると、理科の教員の授業では「自然科学や数学的事象」の比率が高いなど、教科の特性と結びついたテーマが選ばれる傾向がある（表2-2）。

Q あなたが指導している探究活動では、主にどのような課題に取り組んでいますか。

図2-3 探究活動のテーマ(経年比較)

高校

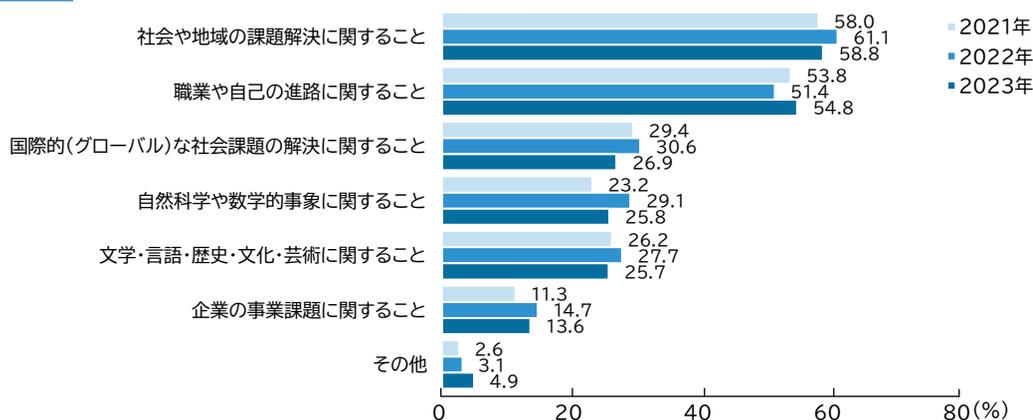


表2-1 探究活動のテーマ(2023年、普通科・学校タイプ別)

高校

(%)

	進路多様校	中堅校B	中堅校A	進学校B	進学校A
社会や地域の課題解決に関すること	59.8	56.4	63.5	<u>66.7</u>	57.8
職業や自己の進路に関すること	58.8	60.6	<u>61.4</u>	53.2	44.2
国際的(グローバル)な社会課題の解決に関すること	11.6	22.0	27.4	32.0	<u>39.7</u>
自然科学や数学的事象に関すること	14.6	21.2	18.8	26.8	<u>41.8</u>
文学・言語・歴史・文化・芸術に関すること	16.6	21.2	23.5	27.3	<u>35.2</u>
企業の事業課題に関すること	13.3	12.3	11.2	<u>14.8</u>	13.8
その他	<u>4.7</u>	<u>4.7</u>	4.0	3.4	3.8

表2-2 探究活動のテーマ(2023年、教科別)

高校

(%)

	国語	地理歴史	公民	数学	理科	外国語
社会や地域の課題解決に関すること	60.5	<u>68.7</u>	63.3	51.8	53.0	61.3
職業や自己の進路に関すること	<u>62.2</u>	53.0	55.4	53.7	49.7	55.8
国際的(グローバル)な社会課題の解決に関すること	25.2	34.9	31.7	20.7	19.6	<u>37.0</u>
自然科学や数学的事象に関すること	16.2	19.9	16.5	30.6	<u>46.1</u>	19.6
文学・言語・歴史・文化・芸術に関すること	33.1	<u>37.7</u>	23.7	16.4	14.2	32.6
企業の事業課題に関すること	12.6	12.8	13.7	14.1	12.0	<u>15.7</u>
その他	4.8	3.9	3.6	4.8	4.2	<u>5.5</u>

※「総合的な探究の時間」や学校設定科目における探究活動について尋ねている（図2-3、表2-1～2）。

※探究活動を「指導している」と回答した教員のみ（図2-3、表2-1～2）。

※複数回答（図2-3、表2-1～2）。

※学校タイプはp.5参照（表2-1）。

※表2-1は学校タイプの5群中、表2-2は教科の6群中、もっとも比率が高いものにそれぞれ下線を引いている。

高校における探究活動の内容

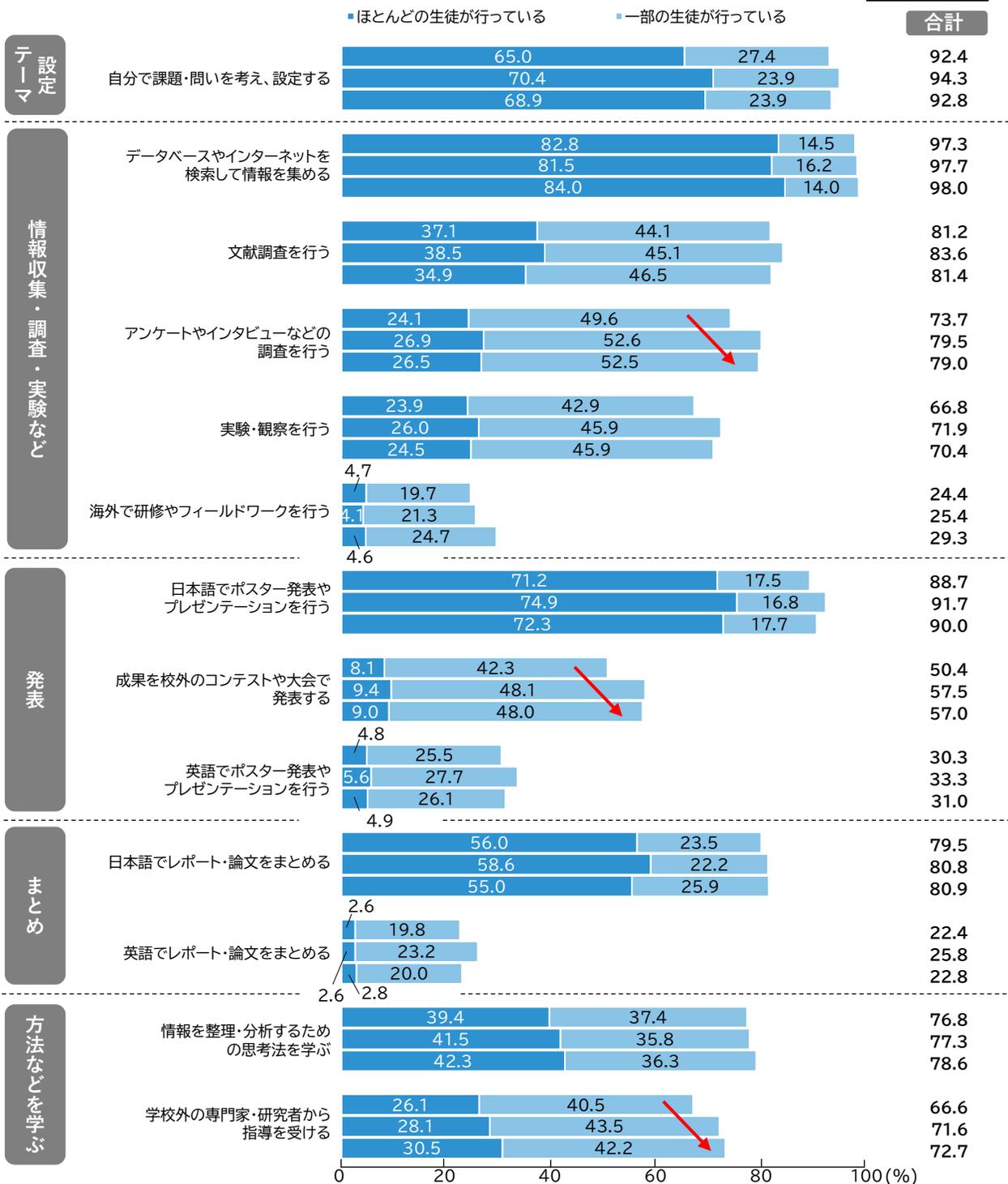
調査や発表、専門家からの指導など外部との関わりが増加

生徒の多くが行っている探究活動の内容は、インターネットなどを「検索して情報を集める」、「課題・問いを考え、設定する」「日本語でポスター発表やプレゼンテーションを行う」で、2021年から傾向は変わっていない。ここ2年間の変化をみると、比率が5ポイント以上増加しているのは、「成果を校外のコンテストや大会で発表する」「学校外の専門家・研究者から指導を受ける」「アンケートやインタビューなどの調査を行う」で、学校外の場やリソースを活用する活動が増加しているが、ここ1年間の変化は小さい。

Q 探究活動のなかで、どれくらいの生徒が次のような活動を行っていますか。

図2-4 生徒が取り組む探究活動の内容(経年比較) 高校

上段：2021年
中段：2022年
下段：2023年



※「総合的な探究の時間」や学校設定科目における探究活動について尋ねている。
※探究活動を「指導している」と回答した教員のみ回答。

宿題の頻度と時間

宿題の時間は減少傾向、「授業でやり残した作業や課題」の宿題が増加

宿題を出す頻度をみると、小・中学校とも、ここ2年間の変化は小さい(図2-5)。しかし、1日(1回)あたりの宿題の時間は、小・中学校とも「15分」の比率が増加している(図2-6)。宿題の内容は、小学校では「反復的な練習」「音読」「学校指定の副教材、問題集」の比率が高く、中学校では「学校指定の副教材、問題集」「授業の復習」「授業でやり残した作業や課題」などが高い。特に、「授業でやり残した作業や課題」の比率は、小・中学校とも、ここ2年間で増加している(図2-7)。

Q あなたはふだんどれくらい宿題を出していますか。

Q あなたがふだん出す宿題は、平均的な児童・生徒にとってほしい1日(1回)何分くらいの量になりますか。

図2-5 宿題を出す頻度(経年比較)

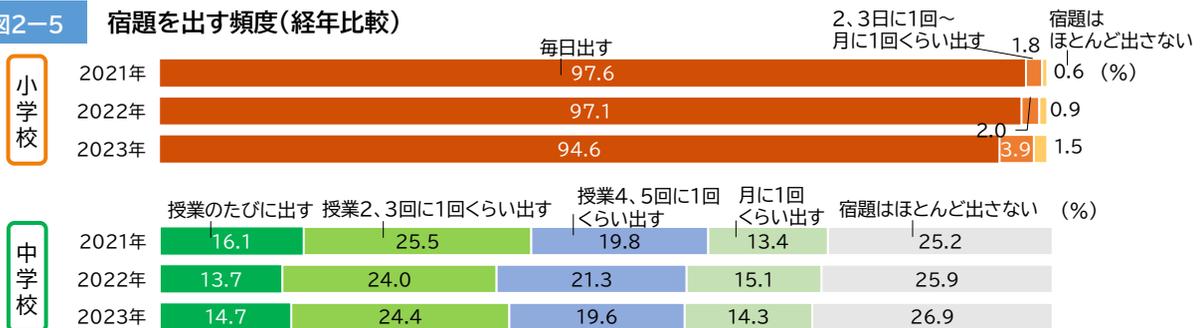
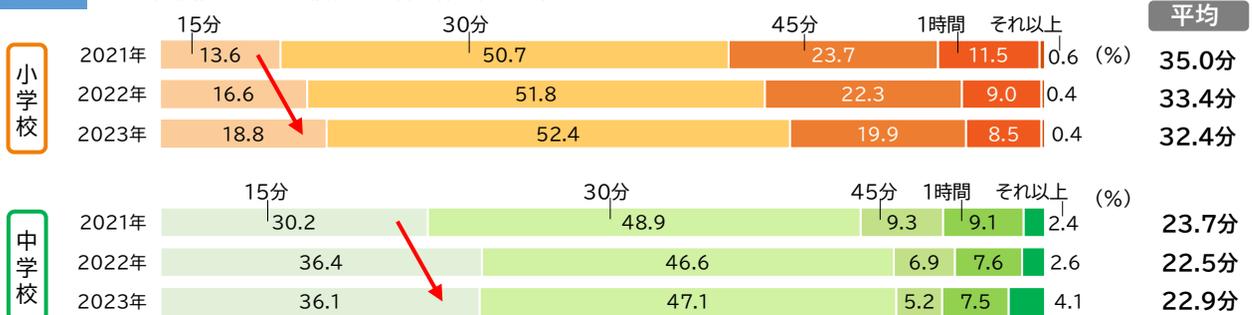


図2-6 1日(1回)あたりの宿題の時間(経年比較)



Q あなたは、ふだん、どのような内容の宿題を出していますか。

表2-3 宿題の内容(経年比較)

宿題の内容	小学校 (%)			中学校 (%)		
	2021年	2022年	2023年	2021年	2022年	2023年
計算や漢字などの反復的な練習	97.1	97.2	96.1	56.6	54.7	55.2
音読	89.6	88.7	87.3	18.2	17.4	17.4
学校指定の副教材、問題集	86.7	88.3	86.5	87.8	85.6	86.1
授業の復習	80.6	77.7	78.6	74.8	72.4	76.0
自学ノート(自主的に課題を決めて学習する宿題)の提出	-	62.9	63.1	-	43.5	45.4
前の学年の学習内容の復習	62.8	58.8	60.1	42.0	39.2	44.0
授業でやり残した作業や課題	39.7	53.4	<u>53.6</u>	56.1	69.9	<u>70.3</u>
自作プリント	<u>58.8</u>	54.2	50.5	64.2	61.5	60.0
教科書の問題	40.1	43.3	<u>46.4</u>	45.9	46.1	46.7
調べ学習	36.7	39.6	39.7	38.1	38.6	38.4
作文やレポート	41.4	38.8	38.0	43.7	43.5	44.5
授業の予習	15.9	14.1	14.6	29.9	26.7	27.0
定期試験対策になる内容	-	-	-	76.5	76.2	76.4
高校入試対策になる内容	-	-	-	58.2	55.4	57.1

※長期休業期間(夏休みなど)を除くふだんのことを尋ねている(図2-5~6、表2-3)。

※「2,3日に1回~月に1回くらい出す」は、「2,3日に1回くらい出す」+「週に1回くらい出す」+「月に1回くらい出す」の%(図2-5小学校)。
 ※小学校は1日、中学校は1回の量を尋ねている。平均時間は「宿題はほとんど出さない」と回答した教員の回答を「0分」として含めて算出している(図2-6)。「それ以上」は、「1時間30分」+「2時間」+「それ以上」の%(図2-6中学校)。

※小学校は「定期試験対策になる内容」「高校入試対策になる内容」の2項目を尋ねていない。「自学ノート(自主的に課題を決めて学習する宿題)の提出」は2021年は尋ねていない(表2-3)。

※宿題の内容は、宿題の頻度(図2-5)で「宿題はほとんど出さない」と回答した教員を除いて算出している。2021年と2023年の比率に5ポイント以上差がある場合に、比率が高いものに下線を引いている(表2-3)。

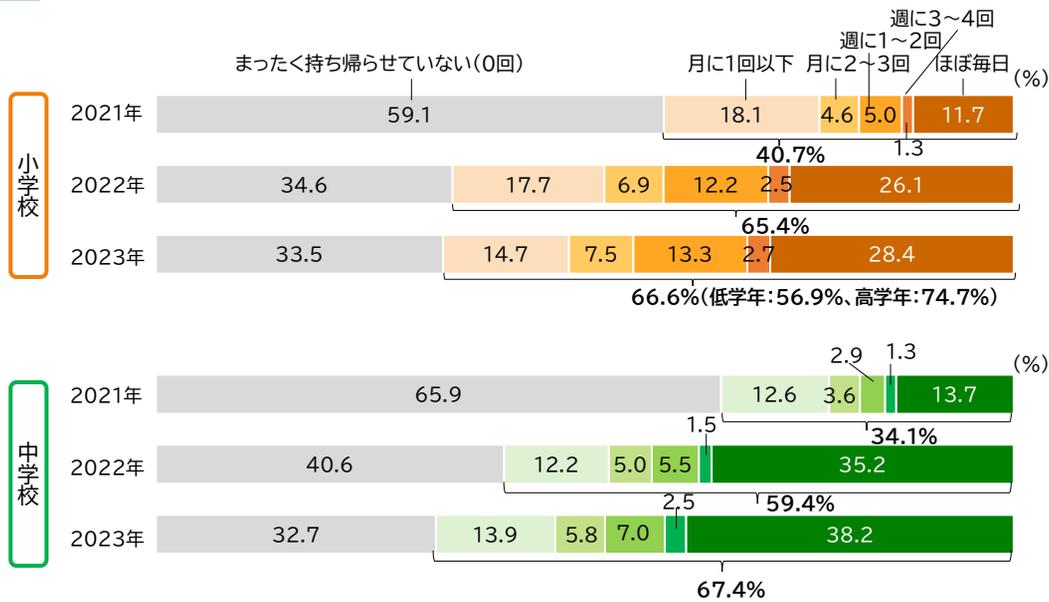
1人1台端末の持ち帰り頻度と使い方

中学校で端末の持ち帰りの比率が増加

中学校では、1人1台端末を家に持ち帰らせている比率が増加し、小学校と同程度の67%になった（「ほぼ毎日」～「月に1回以下」の合計、図2-7）。家での使い方は、ここ2年間の変化は小さいが、小学校では「宿題をさせている」の比率が増加している。また、中学校では「使い方は児童・生徒に任せている」の比率が年々増加している（図2-8）。

Q ふだん(長期休業期間[夏休みなど]を除く)、あなたは1人1台端末を、児童・生徒にどれくらいの頻度で家に持ち帰らせていますか。

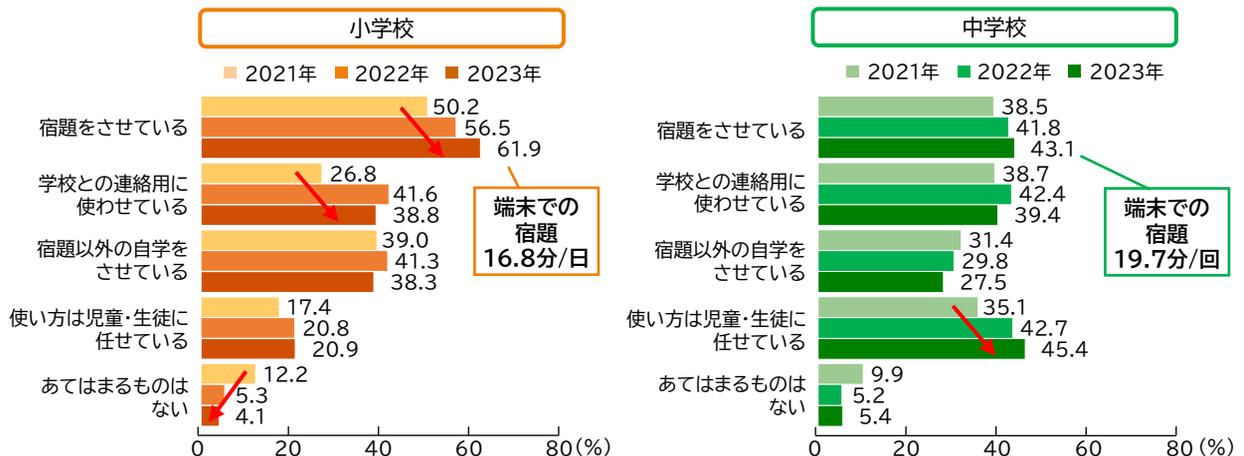
図2-7 1人1台端末の持ち帰り頻度(経年比較)



※1人1台端末の「導入が完了している(あてはまる)」と回答した教員のみ回答。

Q ふだん(長期休業期間[夏休みなど]を除く)、児童・生徒に持ち帰らせた1人1台端末をどのように使わせていますか。

図2-8 持ち帰らせた1人1台端末の使い方(経年比較)



※1人1台端末を家に持ち帰らせている教員(図2-7の「ほぼ毎日」～「月に1回以下」)のみ回答(図2-8)。

※複数回答(図2-8)。

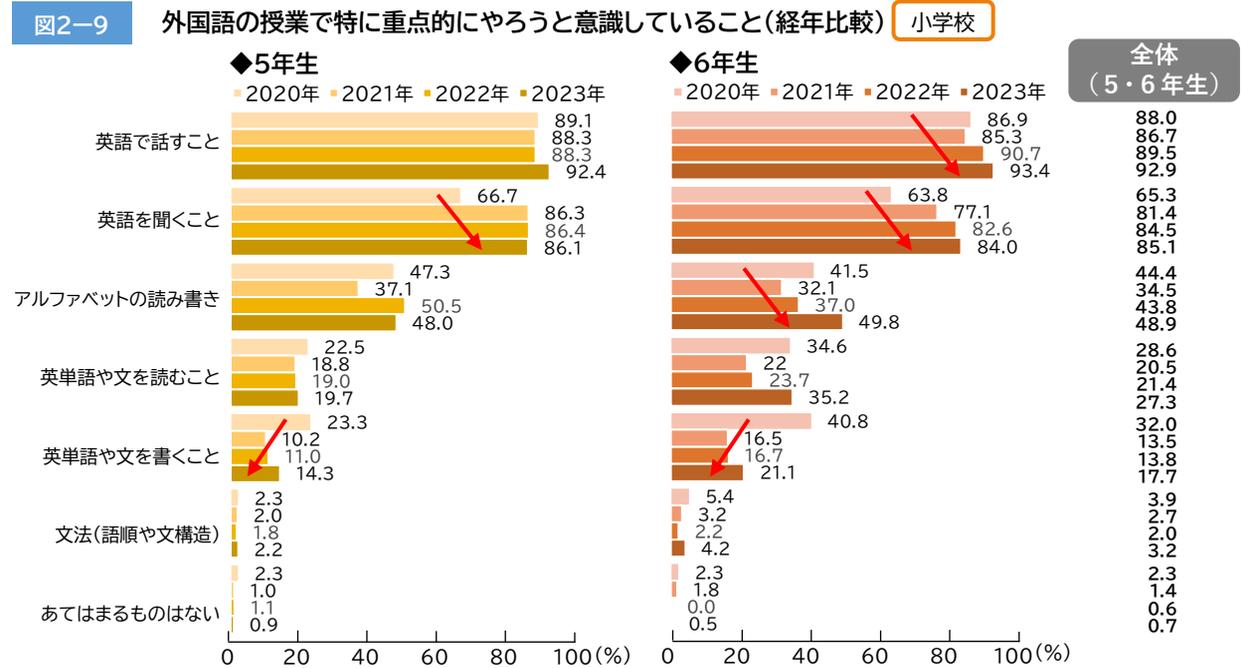
※宿題の時間は、持ち帰らせた1人1台端末で「宿題をさせている」と回答した教員に尋ねた「1人1台端末を使って出す1日(回)の宿題の量」の回答から平均を算出した(図2-8、2023年)。

小学校の外国語の授業と評価

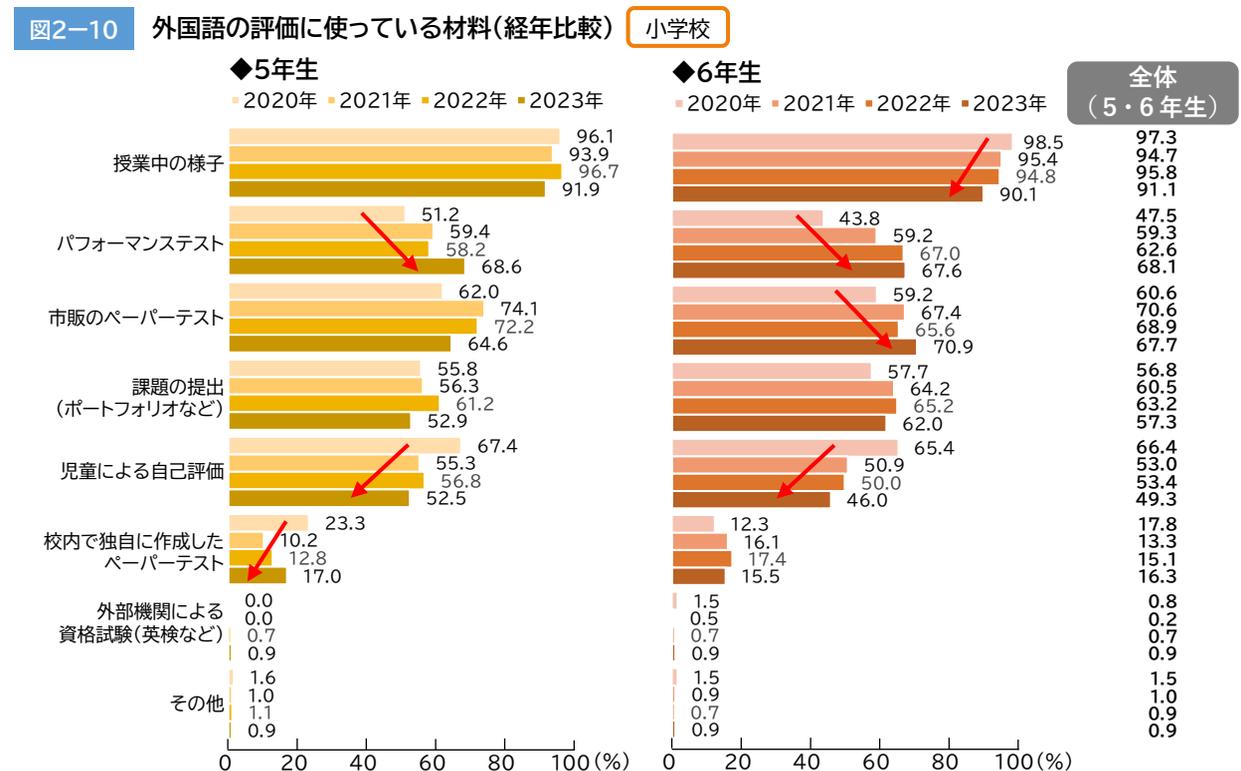
授業では「話す・聞く」を重視
評価の材料として「パフォーマンステスト」が継続して増加

小学校の外国語の授業で教員が特に意識しているのは、「英語で話すこと」「英語を聞くこと」で、小学校段階での大切な指導が2020年から継続して重視されている。「アルファベットの読み書き」「英単語や文を読むこと」は、特に6年生で、2021年からの2年間で増加している一方で、「英単語や文を書くこと」は2020年から2021年にかけて減少したままである(図2-9)。評価の材料では、「パフォーマンステスト」が2020年から継続して増加している。「英語で話すこと」の評価において重要な役割を果たすためだと考えられる(図2-10)。

Q「外国語」の授業で、特に重点的にやろうと意識していることはありますか。



Q「外国語」の評価の材料には何を使っていますか。



※5年生と6年生の担任のうち、「外国語の授業を担当している」と回答した教員のみ(図2-9~10)。
※複数回答(図2-9~10)。

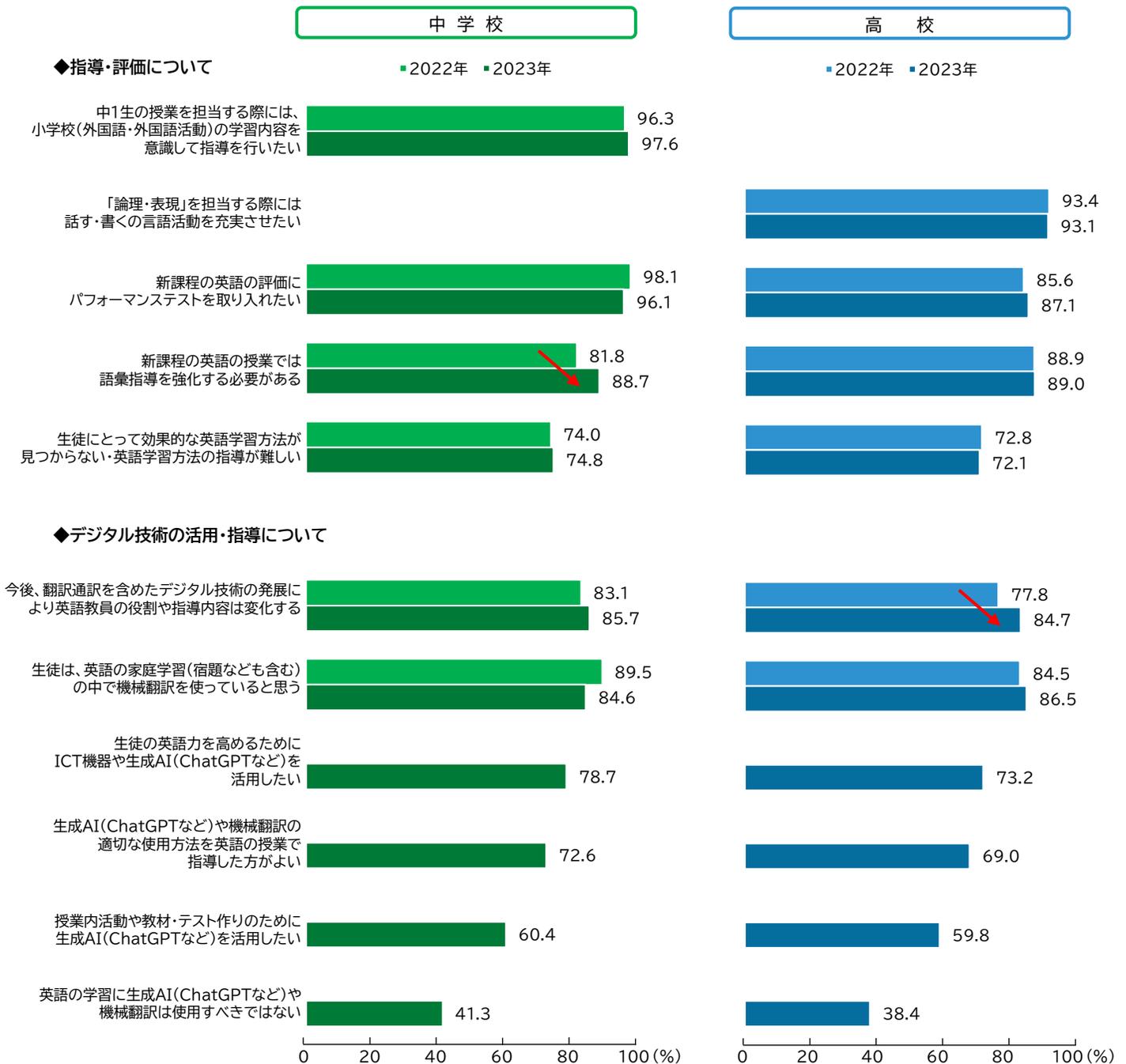
中学校・高校の外国語の指導と評価

「生成AIや機械翻訳の適切な使用方法を英語の授業で指導した方がよい」
は約7割

指導・評価（全般）について、ここ1年間の変化は小さいが、中学校で「語彙指導を強化する必要がある」の比率が増加している。また、「効果的な英語学習方法が見つからない・英語学習方法の指導が難しい」は、中・高校とも7割台のままである。デジタル技術の活用・指導については、高校で「デジタル技術の発展により英語教員の役割や指導内容は変化する」の比率が増加している。「生成AIや機械翻訳の適切な使用方法を英語の授業で指導した方がよい」の比率は、中・高校とも約7割である。

Q 英語指導において、あなたは次のようなことをどれくらいそう思いますか。

図2-11 英語指導に関する意識(経年比較)



※中学校は「『論理・表現』を担当する際には話す・書くの言語活動を充実させたい」、高校は「中1生の授業を担当する際には、小学校(外国語・外国語活動)の学習内容を意識して指導を行いたい」の各1項目を尋ねていない。
 ※「生徒の英語力を高めるためにICT機器や生成AI(ChatGPTなど)を活用したい」～「英語の学習に生成AI(ChatGPTなど)や機械翻訳は使用すべきではない」の4項目は2022年は尋ねていない。
 ※「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

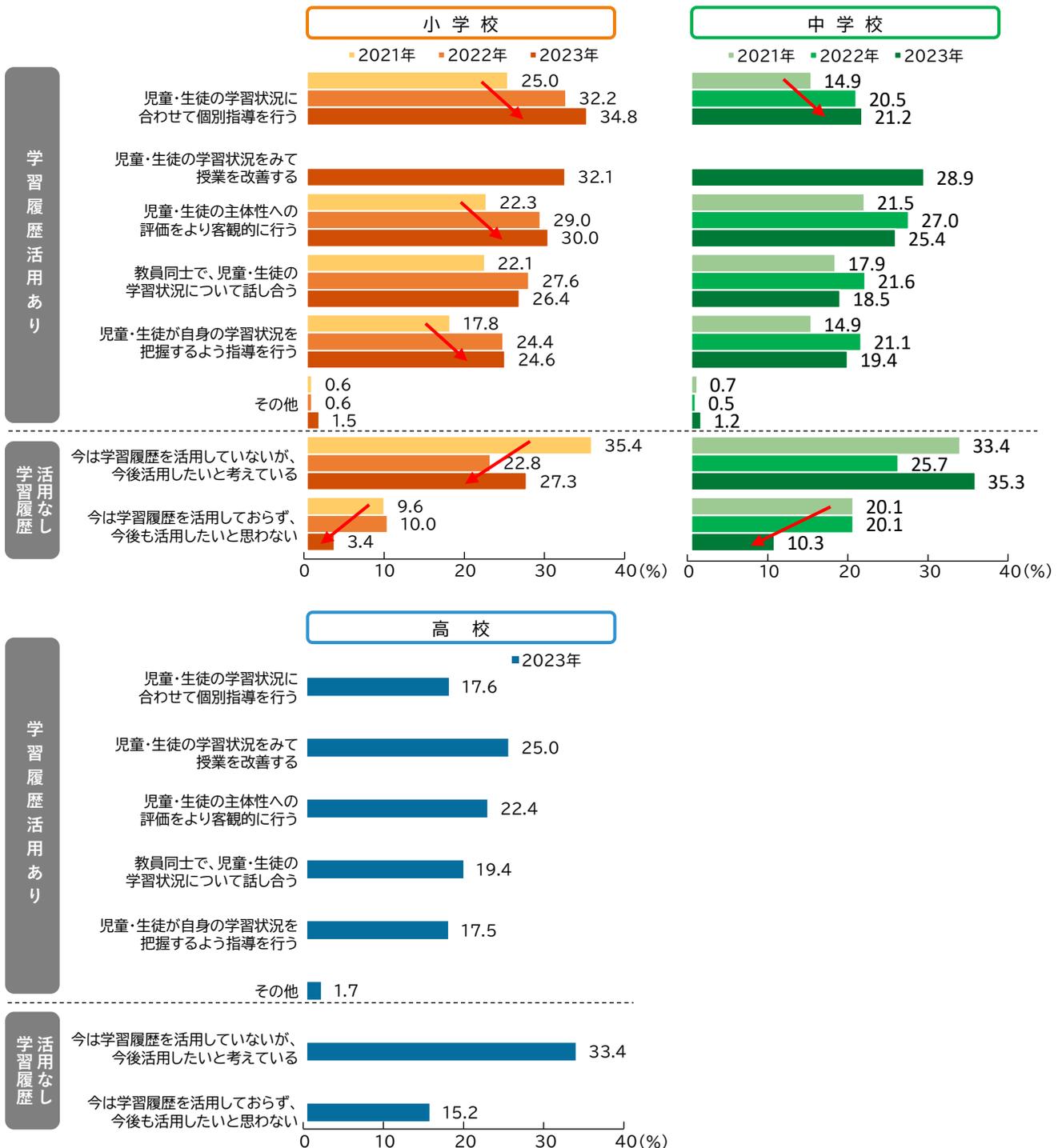
学習履歴の活用実態

ここ2年間で、学習履歴の活用が増加

学習履歴の活用の仕方の変化をみると、ここ2年間で、「個別指導を行う」（小・中学校）、「主体性への評価をより客観的に行う」「児童・生徒が自身の学習状況を把握するよう指導を行う」（小学校）の比率が増加している。また、今回初めて尋ねた「児童・生徒の学習状況をみて授業を改善する」は小学校で3割台、中・高校で2割台である。「今は学習履歴を活用していないが、今後活用したいと考えている」の2023年の比率は、小学校が2割台、中・高校が3割台であり、学習履歴の活用は今後も進むと考えられる。

Q あなたは1人1台端末に残された児童・生徒の学習履歴を活用して、次のことをしていますか。

図2-12 学習履歴の活用有無と活用の仕方(経年比較)



※小・中学校は、1人1台端末の「導入が完了している（あてはまる）」と回答した教員のみ。高校は2021年、2022年は尋ねていない。
 ※「学習履歴活用あり」の6項目は複数回答、「学習履歴活用なし」の2項目は「学習履歴活用あり」に回答しなかった教員対象で単一回答。

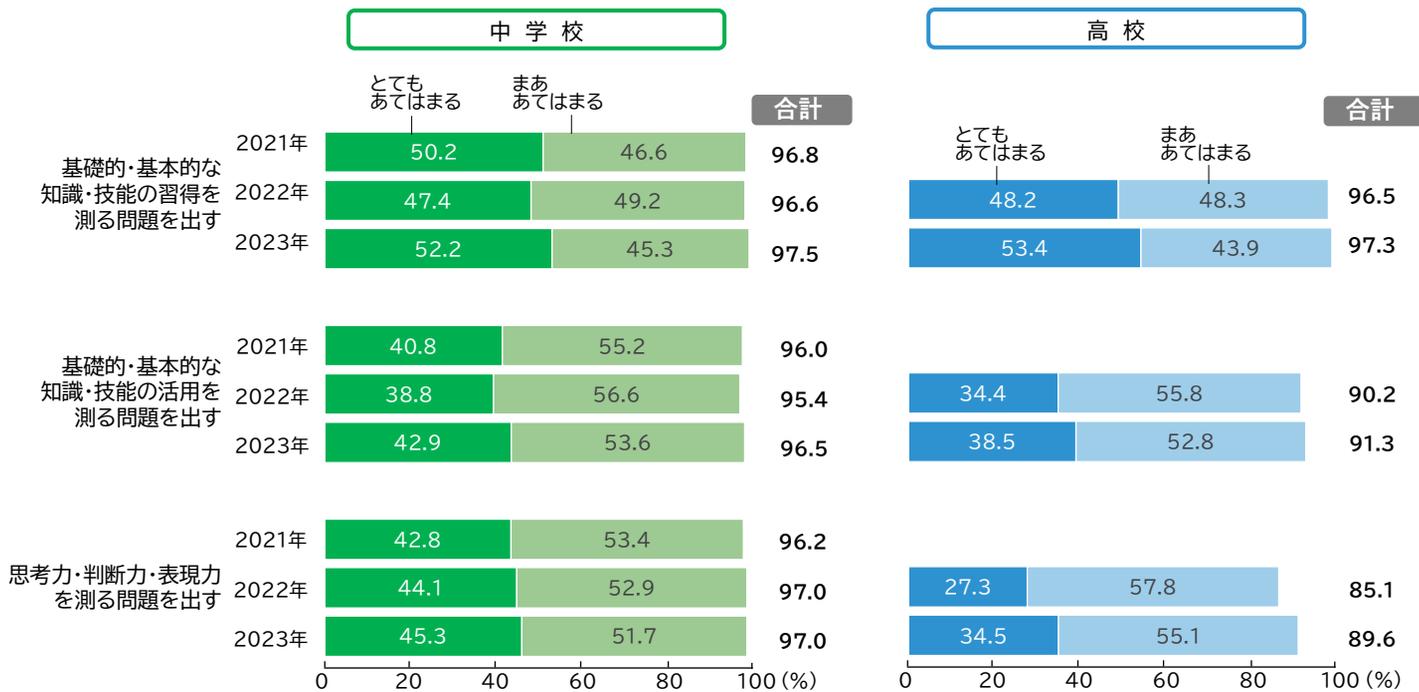
定期試験の内容と回数

高校では、中間・期末テストの回答が減少傾向

定期テストの内容をみると、中学校では、「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」を測る問題を出す比率が、ほぼ同程度（9.5割以上）である。高校では、「習得」（9.5割強）の比率が高いが、「思考力・判断力・表現力」の比率も増加傾向にある（9割弱、図2-13）。1年間のテストの回数をみると、高校は、ここ2年間で、中間テスト、期末テストが減少傾向、単元テストが増加傾向である（表2-4）。

Q あなたが定期テストの問題を作成するときに、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図2-13 定期試験の内容(経年比較)



Q あなたが主に担当している学年の教科について、次のテストは年間何回ありますか(ありましたか)。

表2-4 1年間のテストの回数(各年度、平均)

	回数(回)				
	単元テスト	中間テスト	期末テスト	合計	
中学校	2021年度	4.43	1.66	2.63	8.72
	2022年度	4.69	1.60	2.59	8.88
	2023年度	4.57	1.57	2.58	8.73
高校	2021年度	1.77	2.01	2.75	6.53
	2022年度	2.03	1.98	2.74	6.75
	2023年度	2.24	1.90	2.65	6.79

※高校は2021年は尋ねていない(図2-13)。

※2021年度の数値は、2022年度に、昨年度(2021年度)について回答してもらったもの(表2-4)。

児童・生徒の様子

「学力差が大きい」と感じている教員は9割超 児童・生徒と「話したり相談したりできる関係」は8～9割

児童・生徒の「学力差が大きい」と考える教員は、小・中・高校ともに9割を超えている。また、学校段階が上がるほど、「粘り強く考えようとしていない」「知識・技能が定着していない」「学習習慣が身につけていない」などの比率が高い（図3-1）。一方で、「学級のまとまりがない」は高校でも2割台、「教員と児童・生徒が気軽に話したり相談したりできる関係である」は高校でも8.5割以上で、学級のまとまりや関係性に課題を感じている教員は少ない傾向にある（図3-2）。

Q あなたが担当する教科の授業で、次のことをどれくらいそう思いますか。

図3-1 児童・生徒の様子(2023年)

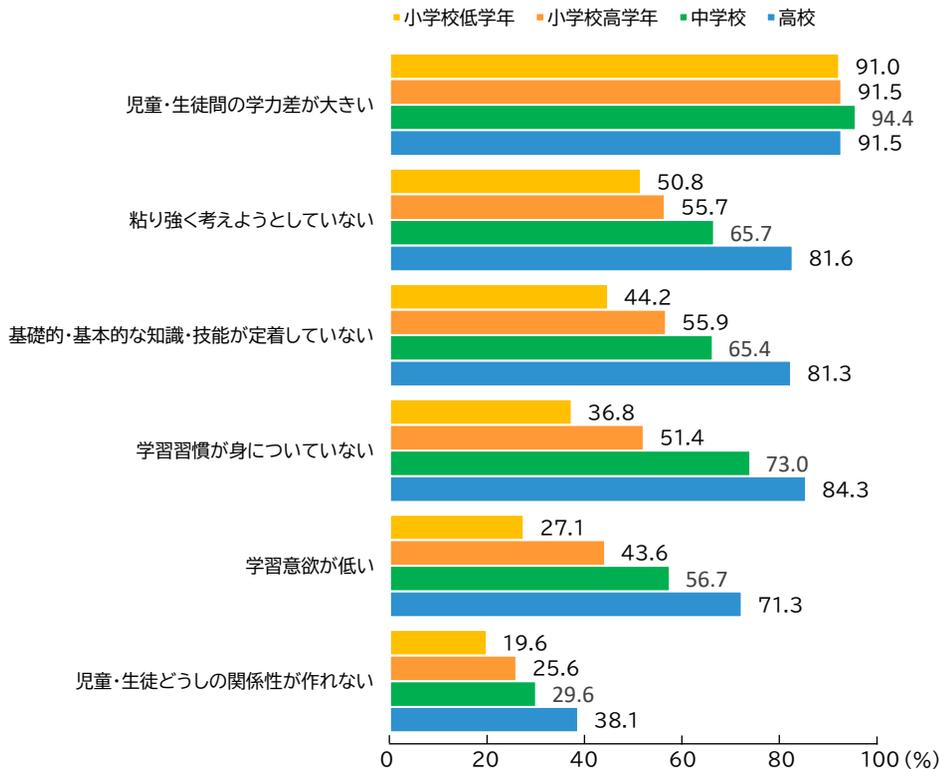
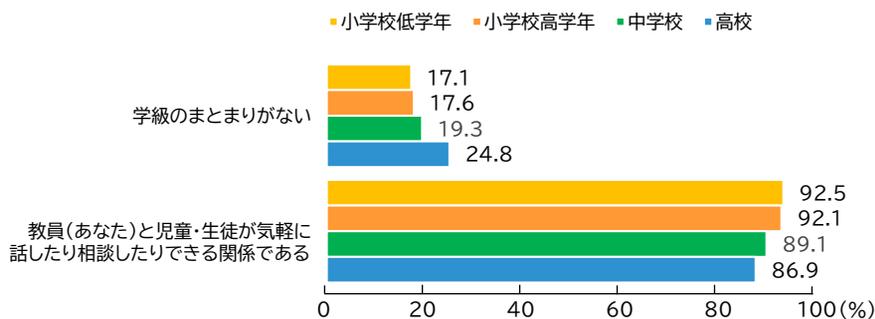


図3-2 学級の様子・教員との関係(2023年)



※同様の項目を2022年にも尋ねているが、尋ね方(Q)が異なるため比較していない(図3-1)。
※「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%(図3-1、図3-2)。

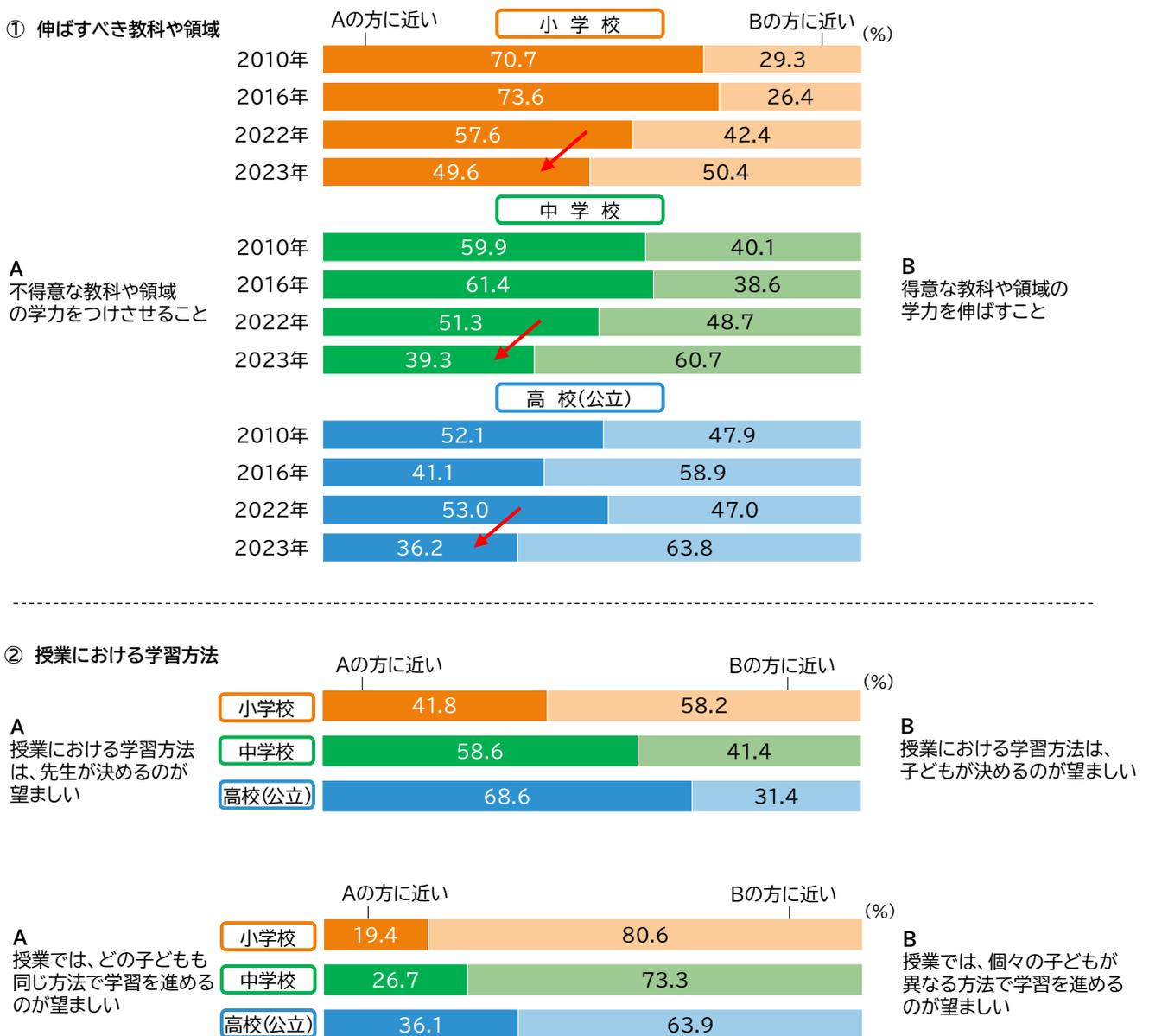
教員の指導観

不得意な教科や領域の学力よりも、得意を伸ばす指導重視に

2010年から2023年にかけての大きな変化として、小・中・高校とも、「不得意な教科や領域の学力をつけさせること」を重視する比率が減少し、「得意な教科や領域の学力を伸ばすこと」が増加した。その結果、「得意」を重視する比率が5～6割台となり、半数を超えた（図3-3①）。また、授業での学習方法について、「先生が決めるのが望ましい」か、それとも「子どもが決めるのが望ましい」かを尋ねたところ、小学校では6割近くが「子どもが決めるのが望ましい」であったが、高校では「先生が決めるのが望ましい」とした比率が7割近い。一方、小・中・高校とも、「個々の子どもが異なる方法で学習を進めるのが望ましい」とする比率が6～8割台と高かった。低学年ほど、子どもに学習方法を委ねている様子がうかがえる（図3-3②）。

Q あなたは、授業や生活指導・生徒指導の面で、どのようなことを大切にしていますか。各ペアについて、あなたがあえていえば重視していると思うほうを1つ選んでください。

図3-3 教員の指導観(①:経年比較、②:2023年)



※2010年、2016年の数値は「学習指導基本調査」の結果（p.4参照）。2010年の高校は公立の教員のみが対象のため、2016年、2022年、2023年も公立高校（設置区分が「公立」）の教員の回答に絞っている。数値は無回答・不明を除いて算出している。
 ※経年比較できる項目のうち、2022年と2023年の比率に5ポイント以上の差が見られた1項目を示している（図3-3①）。
 ※小学校は「生活指導の面で」、中・高校は「生徒指導の面で」と尋ねている。

教員が高めようとしている資質・能力

「基礎的・基本的な知識・技能」を高めようとしている教員は9割弱、
「批判的に考える力」「ふりかえる力」は2～3割

高めようと考えている資質・能力を尋ねたところ、小・中・高校とも、約9割が「基礎的・基本的な知識・技能」を選択している。小学校は、「自分の考えをわかりやすく話す力」「自分の考えを文章にまとめて表現する力」「人と協力しながら、ものごとを進める力」がそれに続く。中・高校は、「根拠にもとづいて判断する力」「ものごとを論理的に考える力」の比率が高い。一方、「ものごとを批判的に考える力」「自分の学習のやり方やプロセスをふりかえる力」は、小・中・高校とも2～3割と低い（図3-4）。図3-5をみると、学校段階によって上位項目が入れ替わり、教員が高めようとしている力の優先順位が変化の様子がうかがえる。

Q あなたは、授業を通して、児童・生徒のどのような資質・能力を高めようと考えていますか。

図3-4 高めようとしている資質・能力(2023年、学校段階別)

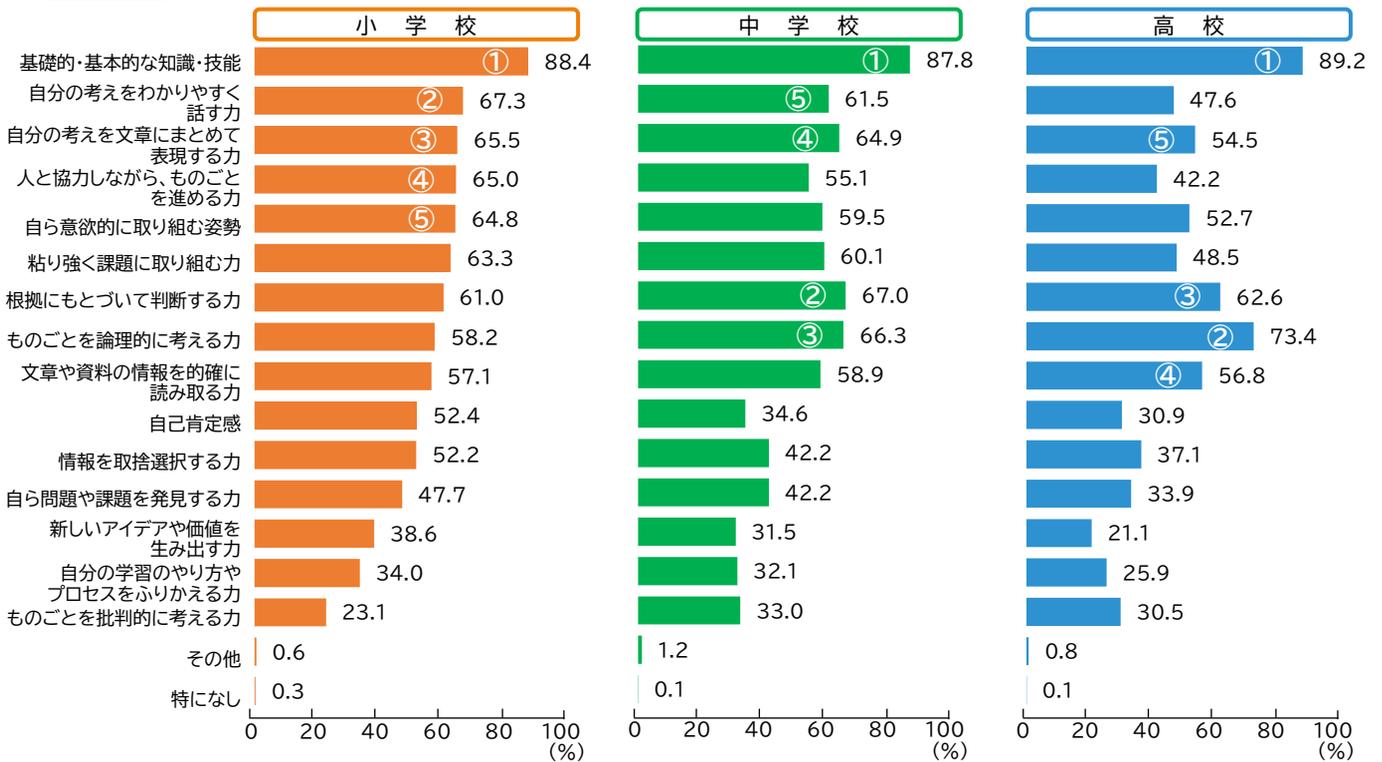
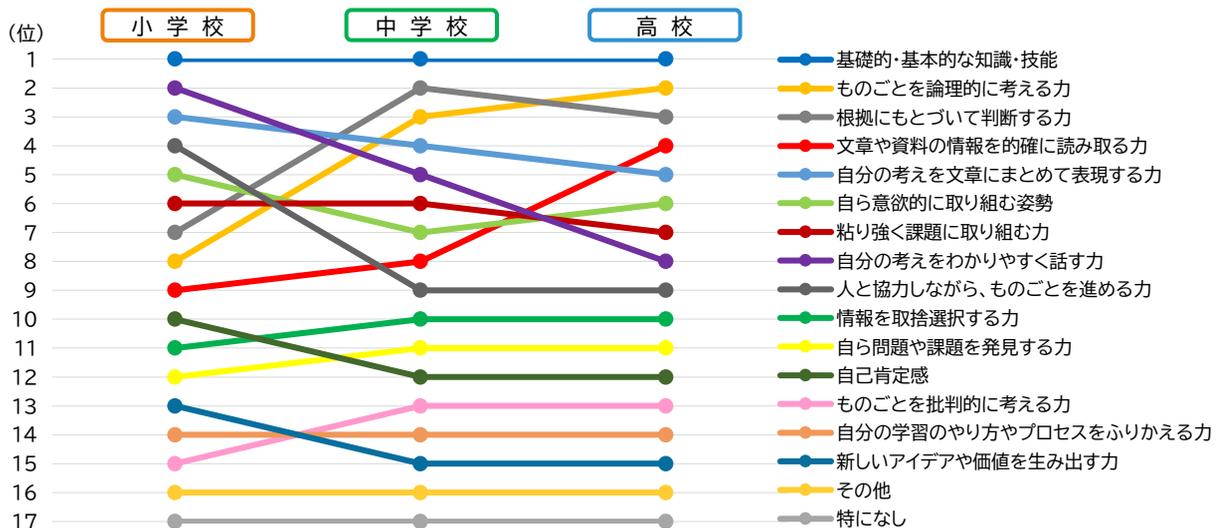


図3-5 高めようとしている資質・能力の順位(2023年、学校段階別)



※複数回答（図3-4、図3-5）。
 ※小学校の降順に並べている。学校段階ごとに、比率が高いものから順に①～⑤をつけている（図3-4）。
 ※縦軸は、学校段階ごとに、各項目の比率の順位を表している。凡例は、高校の降順に並べている（図3-5）。

教員が高まっていると思う資質・能力

高まっていると思う資質・能力は「基礎的・基本的な知識・技能」「人と協力しながら、ものごとを進める力」「自ら意欲的に取り組む姿勢」

高まっていると思う資質・能力を尋ねたところ、小・中・高校とも、上位3項目は「基礎的・基本的な知識・技能」「人と協力しながら、ものごとを進める力」「自ら意欲的に取り組む姿勢」と共通していた。しかし、小学校に比べると、中・高校では、「高まっている」（「とても高まっている」＋「まあ高まっている」）の比率が低い（図3-6）。また、「自己肯定感」「粘り強く課題に取り組む力」も、小学校に比べて、中・高校は、比率も順位も低い。これらの資質・能力を高めることは、高校生（高学年）ほど難しくなるのかもしれない。一方、中・高校では、「根拠にもとづいて判断する力」「ものごとを論理的に考える力」の順位が高い（図3-7）。

Q 児童・生徒の資質・能力は、あなたの授業を通して、どれくらい高まっていると思いますか。

図3-6 高まっていると思う資質・能力(2023年、学校段階別)

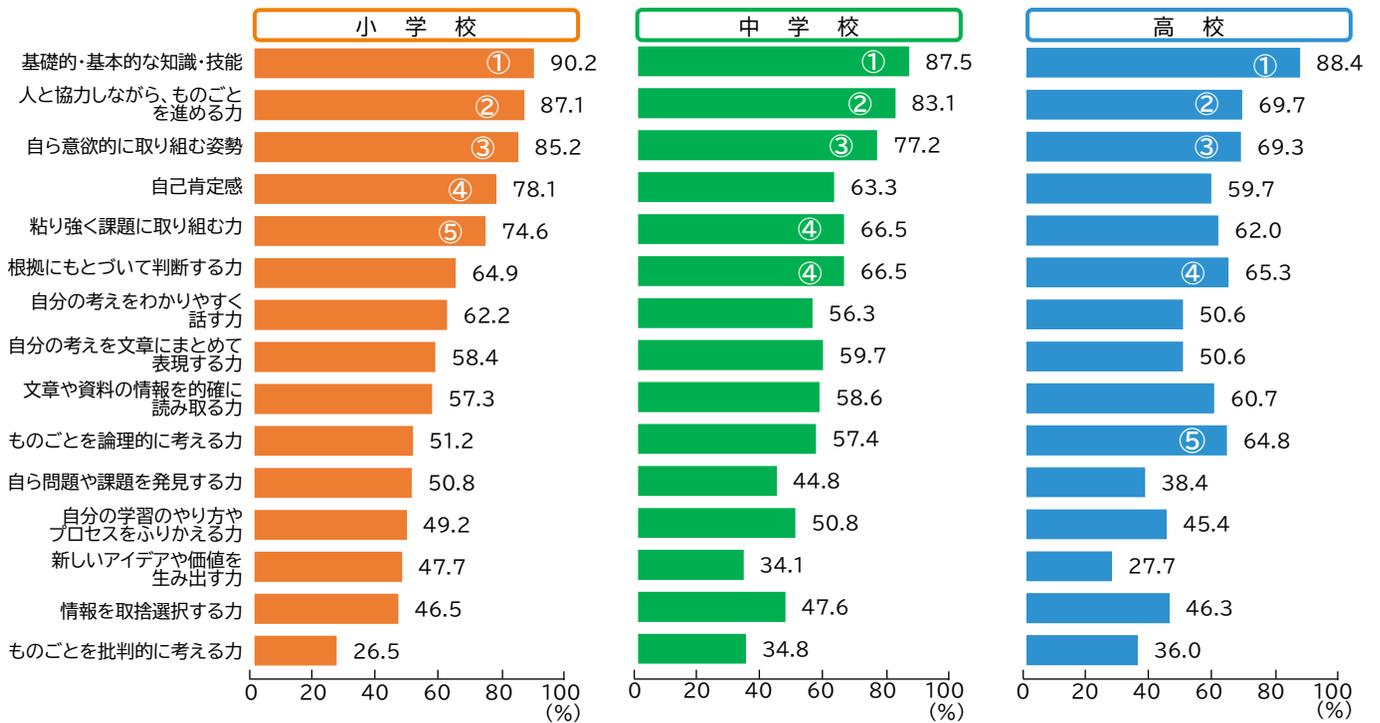
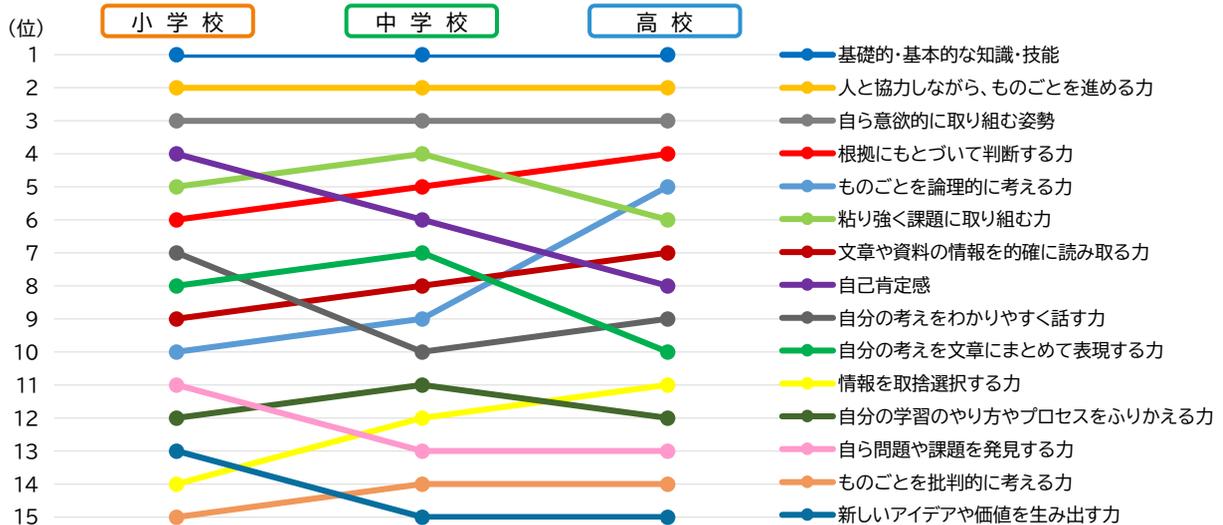


図3-7 高まっていると思う資質・能力の順位(2023年、学校段階別)



※「とても高まっている」＋「まあ高まっている」の% (図3-6、図3-7)。
 ※小学校の降順に並べている。学校段階ごとに、比率が高いものから順に①～⑤をつけている (図3-6)。
 ※縦軸は、学校段階ごとに、各項目の比率の順位を表している。凡例は、高校の降順に並べている (図3-7)。

資質・能力を高めるための授業の工夫

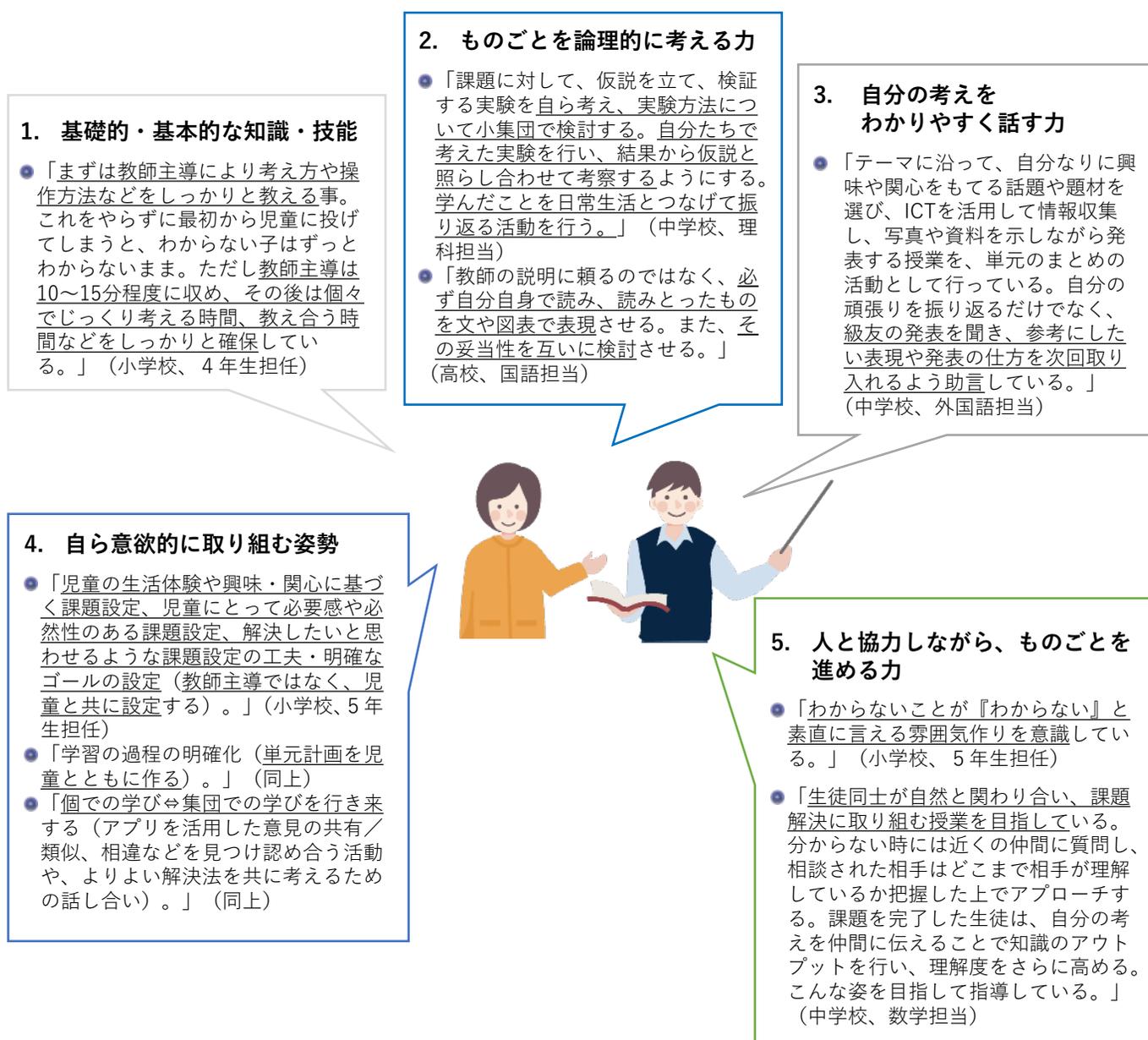
子どもの主体性を引き出すことを目指した工夫が共通してみられる

教員は、児童・生徒の資質・能力を高めるために、授業でどのようなことを意識したり、工夫したりしているのだろうか。高めようとしている資質・能力の上位である「基礎的・基本的な知識・技能」

（小・中・高校で上位）、「自分の考えをわかりやすく話す力」（小学校で上位）、「ものごとを論理的に考える力」（中・高校で上位）と、高まっている資質・能力の上位である「自ら意欲的に取り組む姿勢」「人と協力しながら、ものごとを進める力」について、自由記述を取り上げて示した（図3-8）。対象とする資質・能力や学年によって、教員の意識や工夫は異なるものの、子どもの主体性を引きだそうとしている記述がみられる点は共通していた。

- Q あなたは、前問で選んだ1番目・2番目に高めたい資質・能力を高めるために、どのような授業を行っていますか。
 ※特に意識している点、工夫している点などを具体的に教えてください。
 ※例えば、子どもの主体性、進捗や興味・関心に応じた指導、集団での学び合い、ICT機器の生かし方などを含めて教えてください。

図3-8 資質・能力を高めるために授業で工夫していること(2023年、学校段階別)



※1番目・2番目に高めたい資質・能力として選択された項目ごとに、授業で意識していることや工夫に関する自由記述をピックアップした。
 ※「その他」を除く資質・能力の15項目のうち、選択率の高さや因子分析の結果を踏まえて、5項目のみ示している。
 ※自由記述の末尾にある（ ）内は、教員の担当学年や教科を表している。

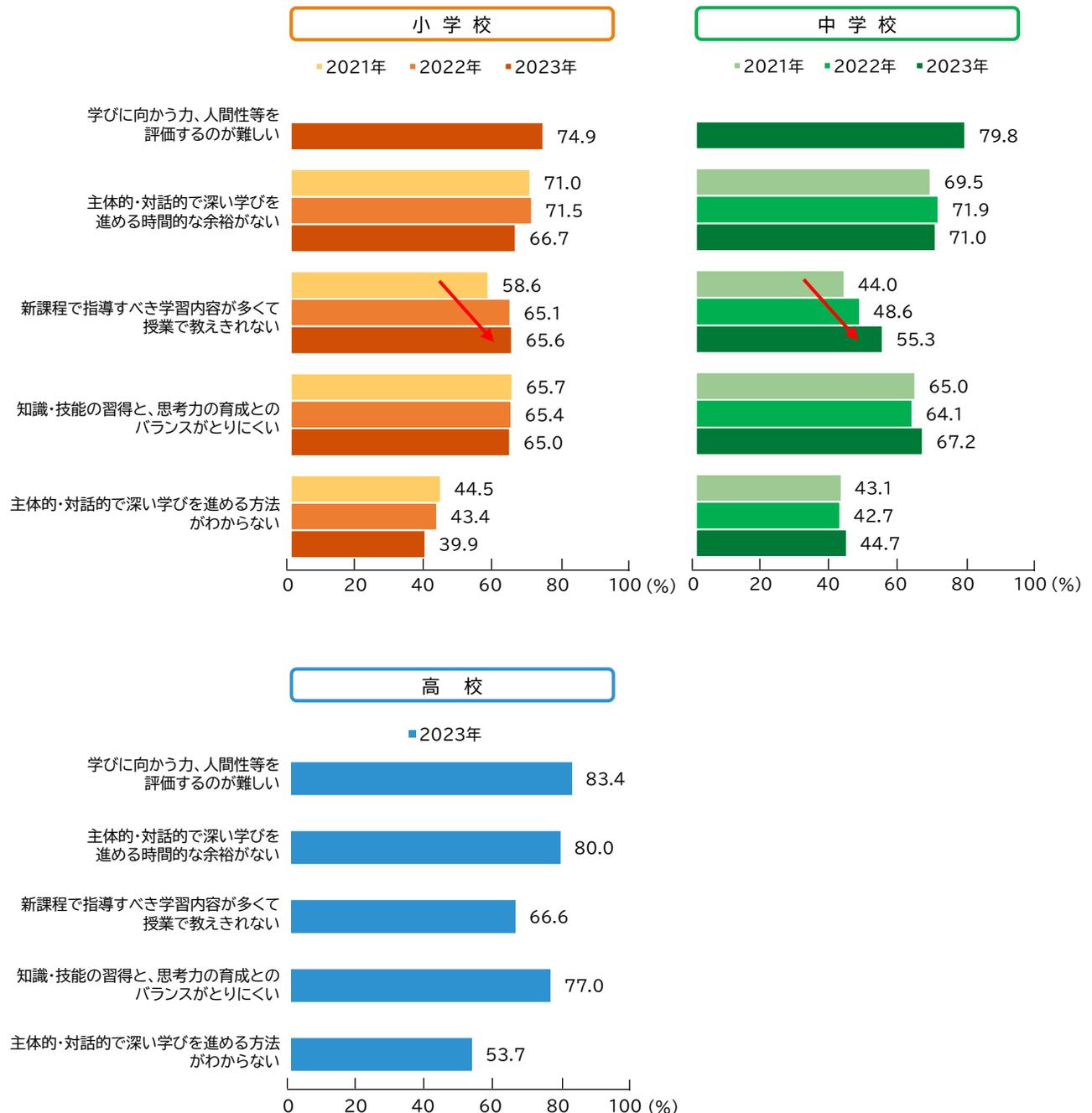
指導について

5～6割台の教員が「指導すべき学習内容が多くて授業で教えきれない」

学校段階によらず、7～8割の教員が「学びに向かう力、人間性等を評価するのが難しい」に「そう思う」（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」）と回答している。また、「主体的・対話的で深い学びを進める時間的な余裕がない」については、小・中学校では「そう思う」が7割前後であるが、高校では8割と高めである。2021年からの2年間では、「指導すべき学習内容が多くて授業で教えきれない」が小・中学校で増加し、中学校ではここ1年間でも5ポイント以上増えた。また、いずれの項目も、高校の比率が小・中学校に比べて高い。教員の指導上の悩みは改善されていない。

Q あなたが担当する教科の授業で、次のことをどれくらいそう思いますか。

図3-9 指導に関して思うこと(経年比較)



※小・中学校の「学びに向かう力、人間性等を評価するのが難しい」は2021年、2022年は尋ねていない。高校は2021年、2022年は尋ねていない。
 ※「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の％。

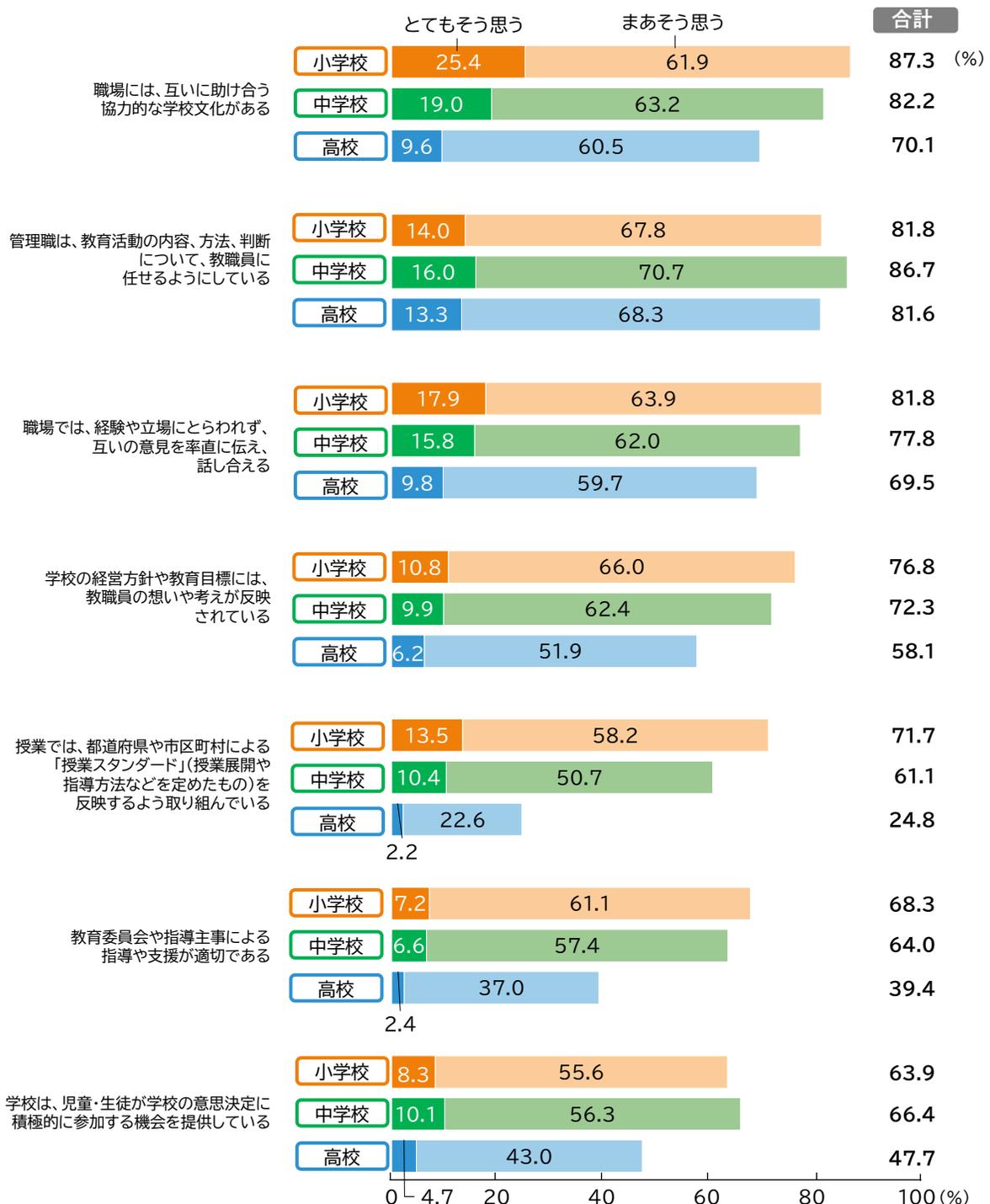
組織について

7～8割台の教員が「互いに助け合う協力的な学校文化がある」

学校の組織に関して尋ねたところ、「管理職は、教育活動の内容、方法、判断について、教職員に任せるようにしている」は、小・中・高校とも「そう思う」（「とてもそう思う」+「まあそう思う」）の比率が8割台と高い。他の項目は、中・高校よりも小学校の比率が高いものが多く、学校段階によって組織の状況が異なることがうかがえる。「互いに助け合う協力的な学校文化がある」「互いの意見を率直に伝え、話し合える」は、小学校が8割台で、同僚との良好な関係がみられる。また、「学校は、児童・生徒が学校の意思決定に積極的に参加する機会を提供している」は、小・中学校が6割台、高校が4割台で、今後さらに児童・生徒の参加の機会が増えることが期待される。

Q あなたは次のようなことについて、どれくらいそう思いますか。

図3-10 組織に関して思うこと(2023年)



仕事について

9割前後の教員が「作成しなければならない事務書類が多い」

学校段階によらず、8～9割の教員が「作成しなければならない事務書類が多い」「授業準備の時間が十分にとれない」に対して「そう思う」（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」）と回答している。特に、「作成しなければならない事務書類が多い」は、小・中学校では9割強、高校もここ2年間で増加しており、業務の削減が進んでいない様子が見える。「休日出勤や時間外勤務が多い」「仕事で精神的に疲れている」も7～8割台と高い。また、「児童・生徒と向き合う時間がとれない」は5割前後であり、「学校内外で自分の学びのための時間が確保できている」は3割台にとどまる（図3-11）。ただし、これらの状況は職場が協力的かによっても異なるようだ（図3-12）。

Q あなたは次のようなことについて、どれくらいそう思いますか。

図3-11 仕事に関して思うこと(経年比較)

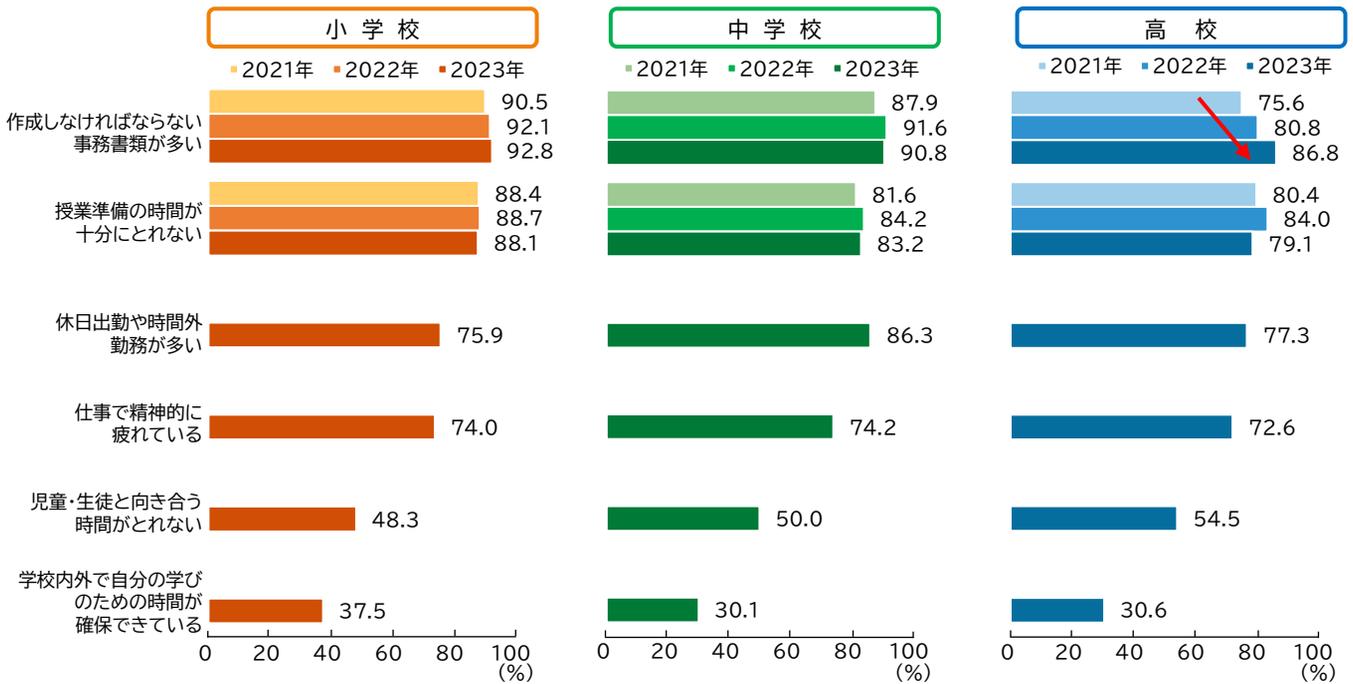
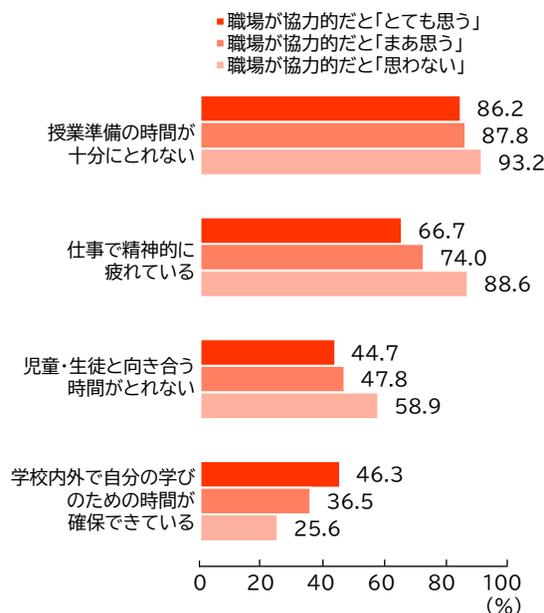


図3-12 仕事に関して思うこと(2023年、協力的な学校文化別) 小学校



※「休日出勤や時間外勤務が多い」～「学校内外で自分の学びのための時間が確保できている」の4項目は2021年、2022年は尋ねていない（図3-11）。

※「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の％。

※「協力的な学校文化別」の「とても思う」は、p.34の「職場には、互いに助け合う協力的な学校文化がある」に「とてもそう思う」と回答した教員、「まあ思う」は同じ項目に「まあそう思う」、「思わない」は「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」と回答した教員（図3-12）。

調査監修・協力・企画・分析メンバー

【調査監修】

耳塚寛明 お茶の水女子大学名誉教授、青山学院大学客員教授
子安 潤 中部大学現代教育学部教授
稲垣 忠 東北学院大学文学部教授

【企画・分析】

岡部悟志 ベネッセ教育総合研究所主任研究員
中垣真紀 ベネッセ教育総合研究所主任研究員
橋本尚美 ベネッセ教育総合研究所主任研究員

本ダイジェスト版および本調査の基礎集計や分析を
ベネッセ教育総合研究所の
ホームページでご覧いただけます



ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでは、
さまざまな調査研究の成果や、現在の教育を
取り巻く課題の紹介・解説などを公開して
います。ぜひご覧ください。

ベネッセ教育総合研究所 検索

<https://berd.benesse.jp/>



「小中高校の学習指導に関する調査2023」ダイジェスト版

発行日 2024年2月22日

発行人 野澤雄樹

編集人 加藤健太郎

発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

編集協力 神田有希子

IGSC01

©Benesse Educational Research and Development Institute
無断転載を禁じます。